

五重塔

幸田露伴

青空文庫

其一

木理美しき槻^{もくめるわ} 洞^{けやきどう}、縁にはわざと赤^{あか}檜^{がし}を用いたる岩畳作りの長火鉢^{ながひばち}に對^{むか}いて話^わし敵^{がたき}もなくただ一人、少しは淋^{さび}しそうに坐^{すわ}り居る三十前後の女、男のように立派な眉^{まゆ}をいつ掃^{はら}いしか剃^そつたる痕^{あと}の青々と、見る眼も覺^さむべき雨後の山の色をとどめて翠^{みどり}の匂^{にお}いひとしお床しく、鼻筋つんと通り眼尻^{めじり}キリりと上り、洗い髪をぐるぐると酷^{むご}く丸^{まる}めて引裂紙^{ひつさき}をあしらいに一本簪^{いっぽんざし}でぐいと留^{とど}めを刺した色気なしの様はつくれど、憎^{にく}いほど烏^ま黒^{くろ}にて艶ある髪^{かみ}の毛の一綜^{ふさ}二綜^{ふさ}後^{おく}れ乱れて、浅黒いながら洩氣^{しやうき}の抜けたる顔にかかれる趣きは、年増^{としまぎら}嫌^{きら}いでも褒^ほめずにはおかれまじき風体、わがものならば着せてやりたい好みのあるにと好色漢^{しれもの}が随分頼まれもせぬ詮議^{せんぎ}を蔭^{かげ}ではすべきに、さりとは外見^{みえ}を捨てて堅義を自慢にした身の装^{つく}り方、柄の選^{えら}択^みこそ野暮ならね高が二子の綿入^{わたいり}れに縹^{しやうすえり}子襟^{こえり}かけたを着てどこに紅^{べに}くさいところもなく、引つ掛けたねんねこばかりは往時^{むかし}何なりしやら疎^{あら}疎^し縹^{しま}の糸織なれど、これとて幾たびか水を潜^{ひそ}つて来た奴^{やつ}なるべし。

今しも台所にては下婢^{おさん}が器物洗^{もの}う音ばかりして家内静かに、ほかには人ある様子もなく、

何心なくいたずらに黒文字を舌端で黷り躍らせなどしていし女、ぷつりとそれを噛み切
つてふいと吹き飛ばし、火鉢の灰かきならし炭火体よく埋け、芋籠より小巾とり出し、
銀ほど光れる長五徳を磨きおとしを拭き銅壺の蓋まで奇麗にして、さて南部霰地の大
鉄瓶をちゃんとかけし後、石尊様詣りのついでに箱根へ寄つて来しものが姉御へ御土産
とくれたらしき寄木細工の小繊麗なる煙草箱を、右の手に持った鼈甲管の煙管で引き
寄せ、長閑に一服吸うて線香の煙るように緩々と煙りを噴き出し、思わず知らず太息
吐いて、多分は良人の手に入るであろうが憎いのつそりめが対うへ廻り、去年使うてやつ
た恩も忘れ上人様に胡麻摺り込んで、たつてこん度の仕事をしようと思ふ分も知らずに願
いを上げたとやら、清吉の話しでは上人様に依怙最良のお情はあつても、名さえ響かぬ
のつそりに大切の仕事を任せらることは檀家方の手前寄進者方の手前もむつかしかろう
なれば、大丈夫此方に命けらるるにきまつたこと、よしまたのつそりに命けらるればとて
彼奴にできる仕事でもなく、彼奴の下に立つて働く者もあるまいなれば見事でかし損ずる
は眼に見えたこととのよしなれど、早く良人がいよいよ御用命かつたと笑い顔して帰つて
来られればよい、類の少い仕事だけに是非して見たい受け合つて見たい、欲徳はどうでも
関わぬ、谷中感応寺の五重塔は川越の源太が作りおつた、ああよくでかした感心など

云われて見たいと面白がつて、いつになく職業しやうばいに気のはずみを打って居らるるに、もしこの仕事を他に奪とられたらどのような腹を立てらるるか肝かん癩しやくを起さるるか知れず、それも道理であつて見れば傍わきから妾わたしの慰めようもないわけ、ああなんにせよめでとう早く帰つて来られればよいと、口には出さねど女房氣質、今朝背面うしろからわが縫いし羽織打ち掛けさせて出したる男の上を氣遣うところへ、表の骨太ほねぶと格子手ごうしあらく開あけて、姉御、兄貴は、なに感応寺へ、仕方がない、それでは姉御に、済みませんが頼み申します、つい昨ゆう晩うべ酔よまして、と後は云わず異な手つきをして話せば、眉まゆ頭がしらに皺しわをよせて笑いながら、仕方のないもの、少し締まるがよい、と云い云い立つて幾らかの金を渡せば、それをもつて門かど口ぐちに出で何やらくどくど押し問答せし末こなたに來たりて、拳骨げんこつで額を抑え、どうも済みませんでした、ありがとうござりまする、と無骨な礼をしたるもおかし。

其二

火は別にとらぬから此方こちへ寄るがよい、と云いながら重げに鉄瓶を取り下して、属輩めしたにも如才なく愛あい嬌きやうを汲くんでやる桜湯一杯、心に花のある待遇あしらいは口に言葉の仇繁あだむけきより

懐かしきに、悪い請求たのみをさえすらりと聴きいてくれし上、胸にわだかまりなくさつぱりと平
日のごとく仕倣しなされては、清吉かえつて心羞うらはずかしく、どうやら魂魄たましいの底の方がむず痒がゆ
いように覚えられ、茶碗ちやわん取る手もおずおずとして進みかぬるばかり、済みませぬという
辞誼じぎを二度ほど繰り返せし後、ようやく乾かわききつたる舌を湿うるおす間もあらせず、今ごろの帰
りとはあまり可愛がられ過ぎたの、ホホ、遊ぶはよけれど職業しごの間を欠いて母親おふくろに心配
さするようでは、男振りが悪いではないか清吉、汝そなたはこのごろ仲町なかしやうの甲州屋様の御本
宅の仕事が済むとすぐに根岸の御別荘のお茶席の方へ廻らせられて居るではないか、良人うち
のも遊ぶは随分好きで汝たちの先に立つて騒ぐは毎々なれど、職業を粗略おろそかにするは大の
嫌い、今もし汝の顔でも見たらばまた例の青筋を立つるに定きまって居るを知らぬでもある
まいに、さあ少し遅くはなつたれど母親の持病が起つたとか何とか方便は幾らでもつくべ
し、早う根岸へ行くがよい、五三様もわかつた人なれば一日をふてて怠惰なまけぬに免じて、見
透すかしても旦那の前は庇護かほうてくるであらう、おお朝飯がまだらしい、三や何でもよい
ほどに御膳ごぜんを其方そちへこしらえよ、湯豆腐に蛤鍋はまなべとは行かぬが新漬に煮豆でも構わぬわの
う、二三杯かつこんですぐと仕事に走りやれ走りやれ、ホホ睡ねむくても昨夜ゆうべをおもえば堪忍がまん
のなろうに精を惜しむな辛防しんぼうせよ、よいは弁当も松に持たせてやるわ、と苦にがくはなけれ

ど効驗ききめある藥の行きとどいた意見に、汗を出して身の不始末を慚はずる正直者の清吉。

姉御、では御厄介ごやつかいになつてすぐに仕事に突つ走ります、と驚掴わしづかみにした手拭てぬぐいで額

拭ふき拭き勝手の方に立つたかとおもえば、もうざらざらざらつと口の中へ打ち込むごとく

茶漬飯五六杯、早くも食うてしまつて出て来たり、さようなら行つてまいります、と肩ぐ

るみに頭をついと一ツ下さげて煙草管きせるを収め、壺屋つぼやの煙草入りようさげ三尺帯に、さすがは氣早き江

戸ツ子氣質かたぎ、草履ぞうりつつかけ門口出づる、途端に今まで黙つていたりし女は急に呼びとめて、

この二三日にのつそりめに逢あうたか、と石から飛んで火の出しごとく声を迸はしらし問いかく

れば、清吉ふりむいて、逢いました逢いました、しかも昨日御殿坂で例ののつそりがひと

しおのつそりと、往生した鶏とりのようにぐたりと首を垂たれながら歩行あるいて居るを見かけまし

たが、今度こつちの棟梁とうりようの対岸むこうに立つてのつそりの癖に及びもない望みをかけ、大丈

夫ではあるものの幾らか棟梁にも姉御にも心配をさせるその面つらが憎くつて面が憎くつて堪たま

りませねば、やいのつそりめと頭から毒を浴びせてくれましたに、あいつのことゆえ氣が

つかず、やいのつそりめ、のつそりめと三度めには傍へ行つて大声で怒鳴つてやりました

ればようやくびつくりして梟ふくろに似た眼で我ひとの顔を見つめ、ああ清吉あーにーいかと寢惚ねぼけ

声えの挨拶あいさつ、やい、汝きさまは充分好い男兒おとこになつたの、紺屋こうやの干場へ夢にでも上のぼつたか大層

高いものを立てたがつて感応寺の和尚様に胡麻を摺り込むという話したが、それは正気の沙汰か寝惚けてかと冷語をまつ向からやつたところ、ハハハ姉御、愚鈍い奴というのは正直ではありませんか、なんと返事をするかとおもえば、我も随分骨を折つて胡麻は摺つて居るが、源太親方を対岸に立てて居るのでどうも胡麻が摺りづらくて困る、親方がのっそり汝やつて見ろよと譲つてくれればいいけれどもうとの馬鹿に虫のいい答え、ハハハ憶い出しても、心配そうに大真面目くさく云つたその面がおかしくて堪りませぬ、あまりおかしいので憎つ気もなくなり、篋棒めと云い捨てに別れましたが。それぎりか。へい。そうかえ、さあ遅くなる、関わずに行くがよい。さようならと清吉は自己が仕事におもむきける、後はひとりで物思い、戸外では無心の児童たちが独楽戦の遊びに声々喧しく、一人殺しじや二人殺しじや、醜態を見よ讐をとつたぞと号きちらす。おもえばこれも順々競争の世の状なり。

其三

世に栄え富める人々は初霜月の更衣も何の苦慮なく、紬に糸織に自己が好き好き

の衣着て寒さに向う貧者の心配も知らず、やれ炬開きじや、やれ口切りじや、それに間に
 合うよう是非とも取り急いで茶室成就よ待合の庇廂繕えよ、夜半のむら時雨も一服やりな
 がらでうては面白く窓撲つ音を聞きがたしとの贅沢いうて、木枯凄まじく鐘の音氷
 るようなつて来る辛き冬をば愉快いものかなんぞに心得らるれど、その茶室の床板削
 りに鉋礪ぐ手の冷えわたり、その庇廂の大和がき結いに吹きさらされて 疝癰も起すこ
 とある職人風情は、どれほどの悪い業を前の世になしおきて、同じ時候に他とは違い悩め
 困しませらるるものぞや、取り分け職人仲間の中でも世才に疎く心好き 吾 夫、腕は源
 太親方さえ去年いろいろ世話して下されし節に、立派なものじやと賞められしほど確実な
 れど、寛濶の氣質ゆえに仕事も取り脱りがちで、好いことはいつも他に奪られ年中嬉し
 からぬ生活かたに日を送り月を迎うる味気なさ、膝頭の抜けたを辛くも埋め綴つた股
 引ばかりわが夫にはかせおくこと、婦女の身としては他人の見る眼も羞ずかしけれど、
 何にもかも貧がさする不如意に是非のなく、いま縫う猪之が綿入れも洗い曝した松坂縞、
 丹誠一つで着させても着させ榮えなきばかりでなく見ともないほど針目がち、それを先刻
 は頑是ない幼な心といいながら、母様其衣は誰がのじや、小さいからは我の衣服か、嬉し
 いのうと悦んでそのまま戸外へ駈け出し、珍らしゆう暖かい天氣に浮かれて小竿持ち、空

に飛び交う赤蜻蛉あかとんぼを撲はたいて取ろうとどこの町まで行つたやら、ああ考え込めば裁縫しじも厭いと気になつて来る、せめて腕の半分も吾夫の気心が働いてくれたならばこうも貧乏はしまいに、技倆わざはあつても宝の持ち腐れの俗諺たとえの通り、いつその手腕うでの顯あらわれて万人の眼に止まるといふことの目的あてもない、たたき大工穴鑿あなほり大工、のつそりという忌々いまいましい譚名あだなさえ負わせられて同業中なかまうちにも輕かろしめらるる齒痒はがゆさ恨めしさ、蔭かげでやきもきと妾わたしが思うには似ず平氣なが憎らしいほどなりしが、今度はまたどうしたことか感応寺に五重塔の建つということ聞くや否や、急にむらむらとその仕事を是非する氣になつて、恩のある親方様が望まるるをも関わらず胸欲むねに、このような身代の身に引き受きようとは、ちとえら過ぎると連れ添つれう妾わたしでさえ思うものを、他人はなんと噂うわさするであろう、ましてや親方様は定めし憎いのつそりめと怒つてござろう、お吉様はなおさら義理知らずの奴めと恨んでござろう、今日は大抵どちらにか任すと言上人様のお定めきなさるはずとて、今朝出て行かれしがまだ歸られず、どうか今度の仕事だけはあれほど吾夫は望んで居らるるとも此方こちは分に応ぜず、親方には義理もありかたがた親方の方に上人様の任さるればよいと思うような氣持もするし、また親方様の大氣にて別段怒りもなさらずば、吾夫にさせて見事成就させたいような氣持もする、ええ氣の揉もめる、どうなることか、とても良人うちにはお任せなさるまいが

もしもいよいよ吾夫のすることになったら、どのようにまあ親方様お吉様の腹立てらるる
 か知れぬ、ああ心配に頭脳あたまの痛む、またこれが知れたらば女の要いらぬ無益むだ心配、それゆえ
 いつも身体の弱いと、有情やさしくて無理な叱言こいことを受くるであらう、もう止めましょ止めましょ、
 ああ痛、と薄痘痕うすいものある蒼い顔あおを蹙しかめながら即効紙の貼はつてある左右の顚顚こめかみを、縫い物
 捨てて両手で圧おさえる女の、齢は二十五六、眼鼻立ちも醜みにくからねど美味うまきもの食あわぬに膩あぶら
 気け少く肌理きめ荒れたる態さまあわれにて、檻褸ぼろぎ衣服にそそけ髪かみますます悲しき風情ふうせいなるが、つ
 くづく独り歎ひとずる時しも、台所の劃しきりの破れ障子がりりと開けて、母様これを見てくれ、
 と猪之が云うにびっくりして、汝そなたはいつからそこにいた、と云いながら見れば、四分板六
 分板の切れ端を積ありんで現然ありありと真似まねび建てたる五重塔、思わず母親涙になつて、お好み
 児こぞと声曇こもらし、いきなり猪之に抱いだきつきぬ。

其四

当時なうてに有名の番匠川越の源太が受け負おいて作りなしたる谷中感応寺の、どこに一つ批点
 を打つべきところあらうはずなく、五十疊敷格ごうてんじよう天井の本堂、橋をあぎむく長き廻廊、

幾部かの客殿、大和尚が居室、茶室、学徒所化の居るべきところ、庫裡、浴室、玄関まで、あるは莊嚴を尽しあるは堅固を極め、あるは清らかにあるは寂びておのおのそのよろしきに適い、結構少しも申し分なし。そもそも微々たる旧基を振るいてかほどの大寺を成せるは誰ぞ。法諱を聞けばそのころの三歳児も合掌礼拝すべきほど世に知られたる宇陀の朗円上人とて、早くより身延の山に螢雪の苦学を積まれ、中ごろ六十余州に雲水の修行をかさね、毘婆舍那の三行に寂靜の慧剣を礪ぎ、四種の悉檀に濟度の法音を響かせられたる七十有余の老和尚、骨は俗界の葷羶を避くるによつて鶴のごとくに痩せ、眼は人世の紛紜に厭きて半ば睡れるがごとく、もとより壞空の理を諦して意欲の火炎を胸に揚げらるることもなく、涅槃の真を会して執着の彩色に心を染まさるることもなければ、堂塔を興し伽藍を立てんと望まれしにもあらざれど、徳を慕い風を仰いで寄り来る学徒のいと多くて、それらのものが雨露凌がん便宜も旧のままにてはなくなりしまま、なお少し堂の広くもあれかしなんと独語かれしが根となりて、道徳高き上人の新たに規模を大きくうして寺を建てんと云いたまうぞと、このこと八方に伝播れば、中には徒弟の伶俐なるがみずから奮つて四方に馳せ感応寺建立に寄附を勧めて行くもあり、働き顔に上人の高徳を演べ説き聞かし富豪を慫慂めて喜捨せしむる信徒もあり、さなきだに平素より随

喜^{かつ}渴^{かつ}仰^{よう}の思いを運べるもの雲霞のごときにこの勢いをもつてしたれば、上諸侯より下町人まで先を争い財を投じて、我一番に福^{ふく}田^{でん}へ種子を投じて後の世を安^{やす}樂^{らく}くせんと、富者は黄金白銀を貧者は百銅二百銅を分に応じて寄進せしにぞ、百川海に入るごとく瞬^{また}刻^た間に金錢の驚かるるほど集まりけるが、それより世才に長^たけたるものの世話人となり用人となり、万事万端執^とり行^とうてやがて立派に成就しけるとは、聞いてさえ小氣味のよき話なり。

しかるに悉^{しつ}皆^{かい}成就の暁、用人頭の為右衛門普請諸入用諸雜費一切しめくり、手^て脱^{ぬか}ることなく決算したるになお大金の剩^{あま}れるあり。これをばいかなすべきと役僧の円^{えん}道^{どう}もろとも、髪ある頭に髪なき頭突き合わせて相談したれど別に殊勝なる分別も出でず、田地を買^はわんか畠^{はた}買^はわんか、田も畠も余るほど寄附のあれば今さらまたこの淨財をそのようなことに費すにも及ばじと思案にあまして、面倒なりよきに計らえと皺^{しわ}枯^がれたる御声にて云いたまわんは知れてあれど、恐る恐る円道ある時、思^{おも}はるる用途^{みち}もやと伺^ういしに、塔を建てよとただ一言云われしぎり振り向きもしたまわず、鼈^{べつ}甲^{こう}縁^{ぐち}の大きな眼鏡^{めがね}の中^{うち}より微笑^{かす}かなる眼の光りを放たれて、何の経やら論やらを黙々と読み続けられるが、いよいよ塔の建つに定まって例の源太に、積り書^い出^だせと円道が命^い令^{れい}けしを、知^しつてか知らずにか上人様にお目通り願^{ねが}いたしと、のつそりが来しは今より二月ほど前なりし。

其五

紺とはいえど汗に褪め風に化りて異な色になりし上、幾たびか洗い濯がれたるためそれ
としも見えず、襟の記印の字さえ臃げとなりし絆纏を着て、補綴のあたりし古股引を
はきたる男の、髪は塵埃に塗れて白け、面は日に焼けて品格なき風采のなおさら品格なき
が、うろうろのそのそと感応寺の大門を入りにかかるを、門番尖り声で何者ぞと怪しみ誰
何せば、びっくりしてしばらく眼を見張り、ようやく腰を屈めて馬鹿丁寧に、大工の十兵
衛と申しまする、御普請につきましてお願いに出ました、とおずおず云う風態の何となく
腑には落ちねど、大工とあるに多方源太が弟子かなんぞの使いに來たりしものならんと推
察して、通れと一言押柄に許しける。

十兵衛これに力を得て、四方を見廻しながら森厳しき玄関前にさしかかり、お頼
申すと二三度いえば鼠衣の青黛頭、可愛らしき小坊主の、おもと答えて障子引
き開けしが、応接に慣れたるものの眼捷く人を見て、敷台までも下りず突つ立ちながら、
用事なら庫裡の方へ廻れ、と情なく云い捨てて障子ぴっしやり、後はどこやらの樹頭に啼

く鶯ひよの声ばかりして音もなく響きもなし。なるほどと独り言ひとことしつつ十兵衛庫裡にまわりて
 また案内を請えば、用人為右衛門仔細しさいらしき理屈顔して立ち出で、見なれぬ棟梁殿、いず
 くより何の用事で見えられた、と衣服みなりの粗末なるにはや侮り軽かろしめた言葉遣い、十兵衛さ
 らに気にもとめず、野生わたくしは大工の十兵衛と申すもの、上人様の御眼にかかりお願いをい
 たしたいことのあつてまいりました、どうぞお取次ぎ下されまし、と首こうべを低くして頼み入
 るに、為右衛門じろりと十兵衛が垢臭あかくさき頭上あたまより白の鼻緒の鼠色になつた草履はき居る
 足先まで睨ねめ下し、ならぬ、ならぬ、上人様は俗用にお関かかわりはなされぬわ、願ひという
 は何か知らねど云うて見よ、次第によりては我が取り計らうてやる、とさもさも万事心得
 た用人めかせる才物ぶり。それを無頓着むとんじやくの男の質朴ぶきようにも突き放して、いえ、ありがと
 うはござりますれど上人様に直々じきじきでのうては、申しても役に立ちませぬこと、どうぞた
 だお取次ぎを願いまする、と此方こちの心が醇いっほんぎ粹じなれば先方さきの氣きに触さわる言葉とも斟酌しんしやく
 せず推し返し言え、為右衛門腹には我を頼まぬが憎いかくて慍いりを含み、理わけのわからぬ男じ
 やの、上人様は汝きさまごとき職人らに耳は仮かしたまわぬというに、取り次いでも無益むやくなれば我
 が計らうて得つせんと、甘く遇あしえばつけ上る言い分、もはや何もかも聞いてやらぬ、帰れ
 帰れ、と小人の常態つねとて語氣たちまち粗暴あらくなり、膠にべなく言い捨て立たんとするにあわて

し十兵衛、ではござりましようなれど、と半分いう間なく、うるさい、喧しいと打ち消され、奥の方に入られてしもうて茫然と土間に突つ立つたまま掌の裏の螢に脱去られしごとき思いをなしけるが、是非なく声をあげてまた案内を乞うに、口ある人のありやなしや薄寒き大寺の岑閑と、反響のみはわが耳に墮ち来れど咳声一つ聞えず、玄関にまわりてまた頼むといえ、先刻見たる憎げな伶俐小僧のちよつと顔出して、庫裡へ行けと教えたるに、と独語きて早くも障子びしやり。

また庫裡に廻りまた玄関に行き、また玄関に行き庫裡に廻り、ついには遠慮を忘れて本堂にまで響く大声をあげ、頼む頼むお頼申すと叫べば、其声より大きな声を発して馬鹿めと罵りながら為右衛門ずかずかと立ち出で、僮僕どもこの狂漢を門外に引き出せ、騒々しきを嫌いたまう上人様に知れなば、我らがこやつのために叱らるべしとの下知、心得ましたと先刻より僕人部屋に転がりいし寺僕ら立ちかかり引き出さんとする、土間に坐り込んで出されじとする十兵衛。それ手を取れ足を持ち上げよと多勢口々に罵り騒ぐところへ、後園の花二枝三枝剪んで床の眺めにせんと、境内あちこち逍遙されし朗円上人、木蘭色の無垢を着て左の手に女郎花桔梗、右の手に朱塗の把りの鉢持たせられしまま、図らずここに来かかりたまいぬ。

其六

何事に罵り騒ぐぞ、と上人が下したまう鶴の一声のお言葉に群雀の輩鳴りを歇めて、振り上げし拳を蔵すに地なく、禅僧の問答にありやありやと云いかけしまま一喝されて腰の折けたるとき風情なるもあり、捲り縮めたる袖を体裁惡げに下してこそそと人の後ろに隠るもあり。天を仰げる鼻の孔より火煙も噴くべき驕慢の怒りに意氣昂ぶりし為右衛門も、少しは慚じてや首をたれ掌を揉みながら、自己が発頭人なるに是非なく、ありし次第をわが田に水引き水引き申し出づれば、瘦せ皺びたる顔に深く長く痕いたる法令の皺溝をひとしお深めて、にったりと徐やかに笑いたまい、婦女のように軽く軟らかな声小さく、それならば騒がずともよいこと、為右衛門門汝がただ従順に取り次ぎさえすれば仔細はのうてあろうものを、さあ十兵衛殿とやら老衲について此方へおいで、とんだ気の毒な目に遇わせました、と万人に尊敬い慕わる人はまた格別の心の行き方、未学を軽んぜず下司をも侮らず、親切に温和しく先に立つて静かに導きたまう後について、迂濶な根性にも慈悲の浸み透れば感涙とどめあえぬ十兵衛、だんだんと赤土のしつとりとしたるところ

ろ、飛石の画趣に布かれあるところ、梧桐の影深く四方竹の色ゆかしく茂れるところなど縈り繞り過ぎて、小やかなる折戸を入れれば、花もこれというはなき小庭のただものさびて、有楽形の燈籠に松の落葉の散りかかり、方星宿の手水鉢に苔の蒸せるが見る眼の塵をも洗うばかりなり。

上人庭下駄脱ぎすてて上にあがり、さあ汝も此方へ、と云いさして掌に持たれし花を早速に釣花活に投げこまるるにぞ、十兵衛なかなか怯めず臆せず、手拭で足はたくほどのことも気のつかぬ男とてなすことなく、草履脱いでのとそりと三疊台目の茶室に入りこみ、鼻突き合わすまで上人に近づき坐りて黙々と一礼する態は、礼儀に嫻わねど充分に偽飾なき情の真実をあらわし、幾たびかすぐにも云い出でんとしてなお開きかぬる口をようやくに開きて、舌の動きもたどたどしく、五重の塔の、御願いに出来ましたは五重の塔のためでござります、と藪から棒を突き出したように尻もたてて声の調子も不揃いに、辛くも胸にあることを額やら腋の下の汗とともに絞り出せば、上人おもわず笑いを催され、何か知らねど老衲をば怖いものなぞと思わず、遠慮を忘れてゆると話をするがよい、庫裡の土間に坐り込で動かずにいた様子では、何か深う思い詰めて来たことであろう、さあ遠慮を捨てて急かずに、老衲をば朋友同様におもうて話すがよい、とあくまで慈しき

注意。十兵衛脆くも梟と常々悪口受くる銅鈴眼にはや涙を浮めて、はい、はい、はい、
 ありがとうございます、思い詰めて参上りました、その五重の塔を、こういう野郎で
 ござります、御覧の通り、のっそり十兵衛と口惜しい譚名をつけられて居る奴でござりま
 する、しかしお上人様、真実でござりまする、工事は下手ではござりませぬ、知っており
 ます私しは馬鹿でござります、馬鹿にされております、意気地のない奴でござります、虚
 誕はなかなか申しませぬ、お上人様、大工はできます、大隅流は童児の時から、後藤
 立川二ツの流義も合点致しております、させて、五重塔の仕事を私にさせていただき
 たい、それで参上りました、川越の源太様が積りをしたとは五六日前聞きました、それか
 ら私は寝ませぬわ、お上人様、五重塔は百年に一度一生に一度建つものではござりませぬ
 恩を受けております源太様の仕事を奪りたくはおもいませぬが、ああ賢い人は羨ましい、
 一生一度百年一度の好い仕事を源太様はさるる、死んでも立派に名を残さるる、ああ羨ま
 しい羨ましい、大工となつて生きている生き甲斐もあらるというもの、それに引き代え
 この十兵衛は、鑿手斧もつては源太様にだとして誰にだとして、打つ墨縄の曲ることはあれ
 万が一にも後れを取るようなことは必ず必ずないと思えど、年が年中長屋の羽目板の繕い
 やら馬小屋箱溝の数仕事、天道様が知恵というものを我には賜さらないゆえ仕方がない

と諦めて諦めても、拙い奴らが宮を作り堂を受け負い、見るものの眼から見れば建てさせ
た人が気の毒なほどのものを築造えたを見るたびごとに、内々自分の不運を泣きますわ、
お上人様、時々は口惜しくて技倆もない癖に知恵ばかり達者な奴が憎くもなりますわ、
お上人様、源太様は羨ましい、知恵も達者なれば手腕も達者、ああ羨ましい仕事をなさる
か、我はよ、源太様はよ、情ないこの我はよと、羨ましいがつい高じて女房にも口きかず
泣きながら寝ましたその夜のことに、五重塔を汝作れ今すぐつくれと怖ろしい人にいいつけ
られ、狼狽えて飛び起きさまに道具箱へ手をつ込んだは半分夢で半分現、眼が全く覚め
て見ますれば指の先を鑢鑿につつかけて怪我をしながら道具箱につかまって、いつの間
にか夜具の中から出ていたつまらなさ、行燈の前につくねんと坐ってああ情ない、つま
らないと思いました時のその心持、お上人様、わかりますか、ええ、わかりますか、
これだけが誰にでも分つてくれれば塔も建てなくてもよいのです、どうせ馬鹿なのつそり
十兵衛は死んでもよいのでござりまする、腰拔鋸のように生きていたくもないのですわ、
其夜からというものは真実、真実でござりまする上人様、晴れて居る空を見ても燈光の達
かぬ室の隅の暗いところを見ても、白木造りの五重の塔がぬっと突っ立って私を見下して
おりまするわ、とうとう自分が造りたい気になって、とても及ばぬとは知りながら毎日仕

事を終るとすぐに夜を籠めて五十分一の雛形をつくり、昨夜でちょうど仕上げました、見に来て下されお上人様、頼まれもせぬ仕事はできていた仕事はできない口惜しさ、ええ不運ほど情ないものはないと私が歎けばお上人様、なまじできずば不運も知るまいと女房めが其雛形をば揺り動かしての述懐、無理とは聞えぬだけによけい泣きました、お上人様お慈悲に今度の五重塔は私に建てさせて下され、拝みます、こここの通り、と両手を合わせて頭を畳に、涙は塵を浮べたり。

其七

木彫りの羅漢のように黙々と坐りて、菩提樹の実の珠数繰りながら十兵衛が埒なき述懐に耳を傾け居られし上人、十兵衛が頭を下ぐるを制しとどめて、わかりました、よく合点が行きました、ああ殊勝な心がけを持つて居らるる、立派な考えを蓄えていらるる、学徒どもの示しにもしたいような、老衲も思わず涙のこぼれました、五十分一の雛形とやらも是非見にまいりましょう、しかし汝に感服したればとて今すぐに五重の塔の工事を汝に任するわと、軽忽なことを老衲の独断で言うわけにもならねば、これだけは明

瞭^りとことわっておきまする、いずれ頼むとも頼まぬともそれは表立って、老衲^{らうなつ}からでは
なく感応寺から沙汰をしましょう、ともかくも幸い今日は閑暇^{ひま}のあれば汝^なが作つた雛形^{ひながた}を
見たし、案内してこれよりすぐに汝^なが家へ老衲^{らうなつ}を連れて行てはくれぬか、とすこしも辺^{ようだ}
幅^いを飾らぬ人の、義理^{すじみち}明らかに言葉渋滞^{しぶり}なく云いたまえば、十兵衛満面に笑みを含み
つつ米舂^{つき}くごとくむやみに頭を下げて、はい、はい、はいと答えおりしが、願いをお取り
上げ下されましたか、ああありがとうござりまする、野生^{わたくし}の宅^{うち}へおいで下さりますると、
ああもつたいない、雛形^{ひながた}はじきに野生^{わたくし}めが持つてまいります、御免下され、と云いさま
さすがののつそりも喜悦^{きげつ}に狂^{くる}して平素^{つね}には似^にず、大げさに一つぽくりと礼をばするや否
や、飛石に蹴躓^{けつまず}きながら駈^{かけ}け出してわが家に帰り、帰つたと一言女房にも云わず、いき
なりに雛形^{ひながた}持ち出して人を頼み、二人して息せき急ぎ感応寺へと持ち込み、上人が前にさ
し置きて帰りけるが、上人これを熟視^{よくみ}たまうに、初重より五重までの配^{つりあ}合、屋根底廂^{ひきし}の
勾配^{こうばい}、腰の高さ、椽木^{たるぎ}の割賦^{わりふり}、九輪^{くりん}請花^{うけはな}露盤^{ろうばん}宝珠^{ほうじゆ}の体裁^{たいざい}までどこに可厭^{いや}なるとこ
ろもなく、水際^{みずぎわ}立つたる細工ぶり、これがあの不器用らしき男の手にてできたるものか
と疑^{うたが}わるるほど巧緻^{たくみ}なれば、独りひそかに歎^{なげ}じたまいて、かほどの技倆^{うで}をもちながら空^{むな}し
く埋^{うづ}もれ、名を発せず世を経るものもあることか、傍眼^{わきめ}にさえも気の毒なるを当人の身と

なりてはいかに口惜しきことならん、あわれかかるものに成るべきならば功名を得させて、
 多年抱ける心願に負かざらしめたし、草木とともに朽ちて行く人の身はもとより因縁
 坂和合、よしや惜しむとも惜しみて甲斐なく止めて止まらねど、たとえば木匠の道
 は小なるにせよそれに一心の誠を委ね生命をかけて、欲も大概は忘れ卑劣き念も起さず、
 ただただ鑿をもつてはよく穿らんことを思い、鉋を持つてはよく削らんことを思う心の尊
 さは金にも銀にも比えがたきを、わずかに残す便宜もなくいたずらに北邸の土に没め、
 冥途の苞と齎し去らしめんことと思えば惘然至極なり、良馬主を得ざるの悲しみ、高士世
 に容れられざるの恨みも詮ずるところは異なることなし、よしよし、我図らずも十兵衛が胸
 に懷ける無価の宝珠の微光を認めしこそ縁なれ、こたびの工事を彼に命け、せめては少し
 の報酬をば彼が誠実の心に得させんと思われけるが、ふと思ひよりたまえば川越の源太も
 この工事をことのほかに望める上、彼には本堂庫裏客殿作らせし因みもあり、しかも設計
 予算まではや倣し出してわが眼に入れしも四五日前なり、手腕は彼とて鈍きにあらず、人
 の信用ははるかに十兵衛に超えたり。一つの工事に二人の番匠、これにもさせたし彼にも
 させたし、いずれにせんと上人もさすがこれには迷われける。

明日辰の刻ごろまでに自身当寺へ来たるべし、かねてその方工事仰せつけられたきむね願いたる五重塔の儀につき、上人直接にお話示あるべきよしなれば、衣服等失礼なきよう心得て出頭せよと、厳格に口上を演ぶるは弁舌自慢の円珍とて、唐辛子をむざと嗜み食える祟り鼻の頭にあらわれたる滑稽納所。平日ならば南蛮和尚といえる譚名を呼びて戲談口きき合うべき間なれど、本堂建立中朝夕顔を見しよりおのずと狎れし馴染も今は薄くなりたる上、使僧らしゆう威儀をつくろいて、人さし指中指の二本でややもすれば兜背形の頭顱の頂上を搔く癖ある手をも法衣の袖に殊勝くさく隠蔽し居るに、源太も敬い謹んで承知の旨を頭下げつつ答えけるが、如才なきお吉はわが夫をかかる俗僧にまでよく評わせんとてか帰り際に、出したままにして行く茶菓子とともに幾干銭か包み込み、是非にというて取らせけるは、思えばけしからぬ布施のしようなり。円珍十兵衛が家にも詣りて同じことを演べ帰りけるが、さてその翌日となれば源太は鬚剃り月代して衣服をあらため、今日こそは上人のみずから我に御用仰せつけらるるなるべけれと勢い込んで、庫裏より通り、とある一間に待たされて坐を正しくし扣えける。

態さまこそ異かれ十兵衛も心は同じ張りをもち、導かるるまま打ち通して、人氣のなきに寒さ
 湧わく一室ひとまの中にただ一人兀つくねん然として、今や上人の招よびたまうか、五重の塔の工事一切汝そなた
 に任ずと命令いひつけたまうか、もしまた我には命じたまわらず源太に任ずと定きめたまいしを我にこ
 とわるため招ばれしか、そうにもあらば何とせん、浮むよしなき埋れ木のわが身の末に花
 咲かん頼みも永くなくなるべし、ただ願わくは上人のわが愚かしきを憐あわれみて我に命令た
 まわんことをと、九尺二枚の唐襖からかみに金鳳銀鳳きんほうぎんおう翔かけり舞うその箔模様はくの美しきも眼に止
 めずして、茫々ぼうぼうと暗路やみじに物を探さぐるごとく念想おもひを空に漂わすことやや久しきところへ、例
 の伶俐りこうげな小僧こぼうずいで来たりて、方丈さまの召しますほどにこちらへおいでなされまし、
 と先に立つて案内すれば、すわや願望のぞみのかなうともかなわざるとも定まる時ぞと魯鈍おろかの男
 も胸を騒がせ、導かるるまま随ひとまいて一室ひとまの中へずっと入る、途端にこなたをぎろりつと見
 る眼鋭く怒りを含んで斜めに睨にらむは思いがけなき源太にて、座に上人の影もなし。事の意
 外に十兵衛も足踏みとめて突つ立つたまま一言もなく白眼にらみ合あいしが、是非なく畳二ひら
 ばかりを隔てしところによくやく坐り、力なげ首梢しおしお然おのと己れが膝ひざに氣勢いきおいのなきたそう
 なる眼を注そそぎ居るに引き替え、源太郎は小狗こいぬを瞰みおろ下す猛鷲あらわしの風に臨んで千尺の巖いわの上に
 立つ風情、腹に十分の強みを抱きて、背をも屈まげねば肩をも歪ゆがめず、すつきり端然しやんと構

えたる風姿ふうさいといい面貌きりようといい水際立つたる男振り、万人が万人とも好かずには居られまじき天晴あつばれ小気味のよき好漢おとこなり。

されども世俗の見解けんげには墮おちぬ心の明鏡に照らしてかれこれともに愛し、表面うわべの美醜みしうに露泥なずまれざる上人のかえつていずれをともし昨日までは扱えらびかねられしが、思いつかることのありてか今日はわざわざ二人を招び出されて一室に待たせおかれしが、今しも静々居間を出でられ、畳踏まるる足も軽かろく、先に立つたる小僧が襖明くる後より、すつと入りて座につきたまえば、二人は恭うやまつしい敬みてともに齊ひとしく頭こうべを下さげ、しばらく上げも得せざりしが、ああいじらしや十兵衛が辛くも上げし面には、まだ世馴れざる里の子の貴人きにんの前に出でしように羞はじを含くみて紅潮くれなゐし、額の皺いくすじの幾条の溝みぞには沁にじ出し熱汗あせを湛たたえ、鼻の頭さきにも珠たまを湧かせば腋わきの下には雨なるべし。膝におきたる骨太の掌指ゆびは枯れたる松が枝ごとき岩畳作りになりながら、一本ごとにそれさえもわなわな顫ふるえて一心にただ上人の一言を一期の大事と待つ笑止さ。

源太も黙して言葉なく耳を澄まして命を待つ、どちらをどちらと判わけかぬる、二人の情こころを汲みて知る上人もまたなかなか口を開かん便宜よすがなく、しばしは静まりかえられしが、源太十兵衛ともに聞け、今度建つべき五重塔はただ一ツにて建てんというは汝そなたたち二人、

二人の願いを双方とも聞き届けてはやりたけれど、それはもとよりかないがたく、一人に任さば一人の歎き、誰に定めて命いのちけんという標きめどころ準のあるではなし、役僧用人らの分別にも及ばねば老僧わしが分別にも及ばぬほどに、この分別は汝たちの相談に任す、老僧は関かまわぬ、汝たちの相談の纏まとまりたる通り取り上げてやるべければ、よく家に帰って相談して来よ、老僧が云うべきことはこれぎりじやによつてそう心得て帰るがよいぞ、さあしかと云い渡したぞ、もはや帰つてもよい、しかし今日は老僧も閑暇ひまで退屈なれば茶話しの相手になつてしばらくいてくれ、浮世の噂わしなほど老衲わしに聞かせてくれぬか、その代り老僧も古い話しのおかしなを二ツ三ツ昨日見出したを話して聞かそう、と笑顔やさしく、朋友ともたちかなんぞのように二人をあしろうて、さて何事を云い出さるるやら。

其九

小僧こぼうずがもつて来し茶を上人みずから汲みたまいてすすめらるれば、二人とももつたいたがりて恐れ入りながら頂戴するを、そう遠慮されては言葉に角が取れいで話が丸う行かぬわ、さあ菓子も挾はさんではやらぬから勝手に摘つまんでくれ、と高たか坏つき推しやりてみずからも

天目取り上げ喉を湿したまい、面白い話というも桑門の老僧らにはそうたくさんない
ものながら、このごろ読んだお経の中につくづくなるほどと感心したことのある、聞いて
くれこういう話しじや、むかしある国の長者が二人の子を引きつれてうらかな天氣の節
に、香りのする花の咲き軟らかな草の滋つて居る広野を愉快げに遊行したところ、水は
大分に夏の初めゆえ涸れたれどなお清らかに流れて岸を洗うて居る大きな川に出で逢うた、
その川の中には珠のような小磧やら銀のような砂でできて居る美しい洲のあつたれば、長
者は興に乗じて一尋ばかりの流れを無造作に飛び越え、あなたこなたを見廻せば、洲の
後面の方もまた一尋ほどの流れで陸と隔てられたる別世界、まるで浮世のなまぐさい土地
とは懸絶れた清浄の地であつたまま独り歎び喜んで踊躍したが、涉ろうとしても涉
り得ない二人の兒童が羨ましがって喚び叫ぶを可憐に思い、汝たちには来ることのできぬ
清浄の地であるが、さほどに来たくば渡らしてやるほどに待つていよ、見よ見よわが足
下のこの磧は一々蓮華の形状をなし居る世に珍しき磧なり、わが眼の前のこの砂は一々
五金の光をもてる比類まれなる砂なるぞと説き示せば、二人は遠眼にそれを見ていよいよ
焦躁り渡ろうとするを、長者は徐かに制しながら、洪水の時にても根こぎになつたら
しき棕櫚の樹の一尋余りなを架け渡して橋としてやつたに、我が先へ汝は後にと兄弟争い

闘^{せめ}いだ末、兄は兄だけ力強く弟^{おとと}をついに投げ伏せて我意^がの勝を得たに誇り高ぶり、急ぎそ
 の橋を渡りかけ半途^{なかば}にようやく到^{いた}りし時、弟は起き上りさま口惜しさに力を籠^こめて橋をう
 ごかせば兄はたちまち水に落ち、苦しみ跪^{もが}いて洲に達せしが、この時弟ははやその橋を難
 なく渡り超えかくるを見るより兄もその橋の端を一揺り揺り動かせば、もとより丸木の橋
 なるゆえ弟も堪^{たま}らず水に落ち、わずかに長者の立つたところへ濡^ぬれ滴^{したた}りて這^はい上った、
 その時長者は歎息して、汝たちには何と見ゆる、今汝らが足踏みかけしよりこの洲はたち
 まち前と異なり、磧は黒く醜^{すな}くなり沙は黄ばめる普通^{つね}の沙となれり、見よ見よいかにと告
 げ知らするに二人は驚き、眼^{まなこ}を睜^{みは}りて見れば全く父の言葉に少しも違^{たが}わぬ沙磧^{すないし}、ああか
 るもの取らんとて可愛き弟を悩ませしか、尊^{たつと}き兄を溺^{おほ}らせしかと兄弟ともに慚^はじ悲しみて、
 弟の袂^{たもと}を兄は絞^{もす}り兄の衣裾^{もすそ}を弟は絞^{もす}りて互いにいたわり慰めけるが、かの橋をまた引き来
 たりて洲^{うしろ}の後面なる流れに打ちかけ、はやこの洲には用なければなおもあなたに遊び歩か
 ん、汝たちまずこれを渡れと、長者の言葉に兄弟は顔を見合いて先刻^{さき}には似ず、兄上先に
 お渡りなされ、弟よ先に渡るがよいと譲り合ひしが、年順なれば兄まず渡るその時に、転^{まろ}
 びやすきを氣遣いて弟は端を揺がぬようしかと抑^{おさ}ゆる、その次に弟渡れば兄もまた揺がぬ
 ように抑えやり、長者は苦なく飛び越えて、三人ともにいと長閑^{のびけ}くそぞろに歩むそのうち

に、兄が図らず拾いし石を弟が見れば美しき蓮華の形をなせる石、弟が摘み上げたる砂を兄が覗けば眼も眩く五金の光を放ちていたるに、兄弟ともども歎喜び樂しみ、互いに得たる幸福を互いに深く讃歎し合う、その時長者は懷中より眞実の壁の蓮華を取り出し兄に与えて、弟にも眞実の砂金を袖より出して大切にせよと与えたという、話してしまえば小供欺しのようじやが仏説に虚言はない、小兒欺しでは決してない、噛みしめて見よ味のある話ではないか、どうじや汝たちにも面白いが、老僧には大層面白いが、と軽く云われて深く浸む、譬喩方便も御胸の中にもたる眞実から。源太十兵衛二人とも顔見合せて茫然たり。

其十

感応寺よりの帰り道、半分は死んだようになって十兵衛、どんつく布子の袖組み合わせ、腕拱きつつうかうか歩き、お上人様のあおつしやつたはどちらか一方おとなしく譲れと諭しの謎々とは、何ほど愚鈍な我にも知れたが、ああ譲りたくないものじや、せつかく丹誠に丹誠凝らして、定めし冷えて寒かろうにお寝みなされと親切でしてくる女房の世

話までを、黙つていよよいなと叱り飛ばして夜の眼も合わさず、工夫に工夫を積み重ね、
 今度という今度は一世一代、腕一杯の物を建てたら死んでも恨みはないとまで思い込んだ
 に、悲しや上人様の今日のお諭しさと、道理には違いないそうもなければならぬことじやが、
 これを譲つていつまた五重塔の建つという的あてのあるではなし、一生とてもこの十兵衛は世
 に出ることのならぬ身か、ああ情ない恨めしい、天道様が恨めしい、尊たつと上人様のお慈悲
 は充分わかつていて露ばかりもありがとうなくは思わぬが、ああどうにもこうにもならぬ
 ことじや、相手は恩のある源太親方、それに恨みの向けようもなし、どうしてもこうして
 も温順すなおに此方こちの身を退ひくよりほかに思案も何もないか、ああないか、というて今さら残念
 な、なまじこのようなことおもいたらずに、のっそりだけで済ましていたらばこのように
 残念な苦惱くわうもすまいものを、分際忘れた我が悪わるかった、ああ我が悪い、我が悪い、けれど
 も、ええ、けれども、ええ、思うまい思うまい、十兵衛がのっそりで浮世の伶俐りょうりな人たち
 の物笑いになつてしまえばそれで済むのじや、連れ添う女房かかにまでも内々はたらき活用の利かぬ
 夫じやと唧かこたれながら、夢のように生きて夢のように死んでしまえばそれで済むこと、あ
 きらめて見れば情ない、つくづく世間がつまらない、あんまり世間が酷むご過ぎる、と思うの
 もやつぱり愚痴か、愚痴か知らねど情な過ぎるが、言わず語らず諭された上人様のあの

言葉の真実まことのところを味わえば、あくまでお慈悲の深いのが五臟六腑に浸み透つて未練な愚痴の出端もないわけ、争う二人をどちらにも傷つかぬよう捌さばきたまい、末の末までもによかれと兄弟の子に事寄せて尚とうといお経を解きほぐして、噛かんで含めて下さつたあのお話に比べて見ればもとより我は弟おととの身、ひとしお他に譲らねば人間ひとらしくもないものになる、ああ弟とは辛いものじやと、路みちも見分かで屈托まなこんだの眼は涙に曇りつつ、とぼとぼとして何一ツ愉快たのしみもなきわが家の方に、糸で曳ひかるる木偶でくのように我を忘れて行く途中、この馬鹿野郎きちがい発狂はきやう漢め、我のせつかく洗つたものに何する、馬鹿めとだしぬけに噛かみつくごとく罵ののられ、癩張かんぱり声に胆を冷やしてハツと思えばぐわらり顛倒てんとう、手桶枕ておけに立てかけありし張物板に、我知らず一足二足踏みかけて踏み覆かえしたる不体裁ざまのなさ。

尻餅しりもちついて驚くところを、狐憑きつねつきめ忌々いまいましい、と駄力だちからばかりは近江おうみのお兼かね、顔は子供の福笑ふくわらい戯に眼をつけ歪ゆがめた多福面おかめのごとき房州出らしき下婢おきんの憤怒こぶし、拳を挙げて丁と打ち猿臂えんぴを伸ばして突き飛ばせば、十兵衛堪たまらず汚塵ほりに塗まみれ、はいはい、狐に誑つままれたました御免なされ、と云いながら悪口雑言聞き捨てに痛さを忍びて逃げ走り、ようやくわが家に帰りつけば、おとお帰りか、遅いのでどういふことかと案じていました、まあ塵埃ほこりまぶれになつてどうなされました、と払いにかかるを、構うなと言、気のなさそうな声

で打ち消す。その顔を覗き込む女房にようばの真実心配そうなを見て、何か知らず無性に悲しくな
 ってじつと湿うるみのさしくる眼まなこ、自分で自分を叱るように、ええと図らず声を出し、煙草を
 捻ひねつて何気なくもてなすことはもてなすものの言葉もなし。平時つねに変わる状ありさま態を大方そ
 れと推察すいしてきて慰むる便すべもなく、問うてよきやら問わぬがよきやら心にかかる今日の首
 尾をも、口には出して尋ね得ぬ女房は胸を痛めつつ、その一本は杉すぎ箸ばしで辛くも用を足す
 火箸に挟んで添える消炭の、あわれ甲斐なき火力ちからを頼り土瓶どびんの茶をば温ぬくむるところへ、遊
 びに出たる猪之の戻りて、やあ父様帰つて来たな、父様も建てるか坊も建てたぞ、これ見
 てくれ、ときも勇ましく障子を明けて褒ほめられたさが一杯に罪なくにこりと笑いながら、
 指さし示す塔の模まね形かた。母は襦じゆ袢ばんの袖を噛み声も得たてず泣き出せば、十兵衛涙に浮く
 ばかりの円つぶらの眼まなこを剥むき出し、まじろぎもせでぐいと睨ねめしが、おおでかしたでかした、よ
 くできた、褒ほう美びをやろう、ハツハハハと咽むせび笑いの声高く屋の棟むねにまで響かせしが、その
 まま頭こうべを天てんに対むかわし、ああ、弟とは辛いなあ。

其十一

格子こうし開くる響さき爽やかなること常のごとく、お吉、今帰った、と元氣よげに上り来たる夫の声を聞くより、心配を輪に吹き吹き吸うていし煙草きせる管を邪見至極に抛ほうり出して忙わしく立ち迎え、大層遅かつたではないか、と云いつつ背面うしろへ廻つて羽織を脱がせ、立ちながら臆おそに手伝わせての袖畳み小早く室隅すみの方にそのままさし置き、火鉢そばの傍へすぐまた戻つてたちまち鉄瓶ねに松虫おこの音を發させ、むずと大胡坐おおぐらかき込み居る男の顔をちよつと見しなに、日は暖かでも風が冷たく途中は随分寒ひえましたろ、一瓶ひとつ煖酒ましよか、と痒かゆいところへよく届かす手は口をきくその間に、がたぴしさせず膳ぜんごしらえ、三輪漬は柚ゆの香ゆかし、大根おろし卸で食はらわする鮭卵はらわたは無造作にして氣が利きたり。

源太胸には苦慮おもいあれども幾らかこれに慰められて、猪口ちよくと把りさまに二三杯、後一杯を漫く飲きんで、汝きさまも飲れと与うれば、お吉一口、つけて、置き、焼きかけの海苔のり畳み折つて、追つつけ三子の来そうなもの、と魚屋の名を独り語ひとごとしつ、猪口を返して酌しゃくせし後、上々吉と腹に思えば動かす舌も滑なめらかに、それはそうと今日の首尾は、大丈夫此方こちのものとは極めていても、知らせて下さらぬうちは無益むだな苦勞わたしを妾わはします、お上人様は何と仰せか、またのつそりめはどうなったか、そう真面目顔でむつとりとして居られては心配で心配でなりませぬ、と云われて源太は高笑い。案じてもらうことはない、お慈悲の深い上人様は

どの道我を好漢おれいとおとこにして下さるのよ、ハハハ、なあお吉、弟を可愛がればいい兄きではない
 か、腹の饑へつたものには自分が少しは辛くても飯を分けてやらねばならぬ場合もある、他ひと
 の怖こわいことは一厘ないが強いばかりが男児おとこではないなあ、ハハハ、じつと堪忍がまんして無理に
 弱くなるのも男児だ、ああ立派な男児だ、五重塔は名譽しごとの工事、ただ我われ一人でもものの見事
 に千年壊れぬ名物を万人の眼に残したいが、他の手も知恵も寸分交ぜず川越の源太が手腕うで
 だけで遺のこしたいが、ああ癩かんしやく癩かんしやくを堪忍するのが、ええ、男児だ、男児だ、なるほどいい
 男児だ、上人様に虚言うそはない、せつかく望みをかけた工事を半分他にくれるのはつくづく
 忌々いまいましけれど、ああ、辛い、ええ兄きだ、ハハハ、お吉、我はのつそりに半口やって
 二人で塔を建てようとおもうわ、立派な弱い男児か、賞ほめてくれ賞めてくれ、汝きさまにでも賞
 めてもらわなくてはあまり張合はいのない話した、ハハハと嬉しそうな顔もせで意味のない
 声ばかりはずませて笑えば、お吉は夫の氣を量はかりかね、上人様が何とおっしゃったか知ら
 ぬが妾わたしにはさっぱり分らずちつとも面白くない話し、唐偏朴とうへんぼくのあののつそりめに半口や
 るとはどういうわけ、日ごろの氣性にも似合わない、やるものならば未練氣なしにすつか
 りやってしまうが好いし、もとより此方こちで取るはずなれば要いりもせぬ助太刀頼んで、一人
 の首を二人で切るような卑劣けちなことをするにも当らないではありませぬか、冷水ひやみずで洗つ

たような清潔きれいな腹をもつて居ると他にも云われ自分でも常々云うていた汝おまえが、今日に限つて何という煮えきれない分別、女の妾から見ても意地の足らないぐずぐず思案、賞めませぬ賞めませぬ、どうしてなかなか賞められませぬ、高が相手は此方こちの恩を受けて居るのつそりめ、一体ならば此方こちの仕事を先潜さきくぐりする太い奴と高飛車に叱りつけて、ぐうの音も出させぬようにすればなるのつそりめを、そう甘やかして胸の焼ける連名工事れんみょうしごとをなんでするに当るはずのあらうぞ、甘いばかりが立派のことか、弱いばかりが好い男児か、妾の虫には受け取れませぬ、なんなら妾が一走りのつそりめのところに行つて、重々恐れ入りましたと思ひ切らせて謝罪あやまらせて両手を突かせて来ましようか、と女賢さかしき夫思い。源太は聞いて冷笑あざわらい、何が汝にわかるものか、我のすることを好いとおもっていてさえくるればそれでよいのよ。

其十二

色も香もなく一言に黙つていよとやり込められて、聴きかぬ氣のお吉顔ふり上げ何か云い出したげなりしが、自己おのれよりは一倍きかぬ氣の夫の制するものを、押し返して何ほど云う

とも機嫌きげんを損ずることこそはあれ、口答えの甲斐かいは露なきを経験おぼえあつて知り居れば、連れ添うものに心の奥を語り明かして相談かけざる夫を恨めしくはおもいながら、そこは伶俐りこうの女の分別早く、何も妾よこえぎが遮さへぎつて女の癖に要らざる嘴くちを出すではなけれど、つい気にかか
る仕事の話しゆえ思わず様子の聞きたくて、よけいなことも胸の狭いだけに饒舌しゃべつたわけ、
と自分が真実まこと籠めし言葉をわざとごくごく軽うしてしもうて、どこまでも夫の分別に従う
よう表面うわべを粧うも、幾らか夫の腹の底にある煩悶もしやくしゃを殺そいでやりたさよりの真実まこと。源太
もこれに角張りかかった顔をやわらげ、何ごと皆まわりあわせ天運てんうんじゃ、此方こちの了見りょうけんさえ温順すなおに
和やさしくもつていたならまた好いことの廻つて来ようと、こうおもつて見ればのっそりに半
口やるもかえつて好い心持、世間は氣次第で忌々いまいましくも面白くもなるものゆえ、できる
だけは卑劣けちさびな鑪あつさりを根性に着けず瀟灑せうさいと世を奇麗に渡りさえすればそれで好いわ、と云い
さしてぐいと仰飲あおぎ、後は芝居の噂やら弟子どもが行状みもちの噂、真に罪なき雑話さかなを下物に酒
も過ぎぬほど心よく飲んで、下卑げびた体裁ではあれどとり膳睦むつまじく飯を喫おわり、多おおかた方かたも
う十兵衛が来そうなもの何事もせず待ちかくるに、時は空むなしく経過たつて障子の日ひかげ 一尺動
けどな見え、二尺も移れどな見え、

是非むこう先方より頭かしらを低くし身を縮すぼめて此方こちへ相談に來たり、何とぞ半分なりと仕事をわけ

て下されと、今日の上人様のお慈愛^{なげ}深きお言葉を頼りに泣きついても頼みをかけべきに、何としてこうは遅きや、思いあきらめて望みを捨て、もはや相談にも及ばずとて独りわが家に燻^{くすぼ}り居るか、それともまた此方より行くを待つて居るか、もしも此方の行くを待つて居るといふことならばあまり増長した見なれど、まさかそのような高慢^{いだ}気も出^いすまじ、例ののつそりで悠^{ゆう}長^{ちやう}に構えて居るだけのことならんが、さても氣の長い男め迂濶^{うかつ}にもほどのあれと、煙草ばかりいたずらに喫^ふかしいて、待つには短き日も随分長かりしに、それさえ暮れて群^{むら}烏^{からす}塙^{ねぐら}に帰るころとなれば、さすがに心おもしろからずようやく癩癪^{らさく}の起り起りて耐^{こら}えきれずなりし潮先、据^すえられし晩^{ゆうめし}食^{めし}の膳^{むか}に対^{むか}うとそのまま云いわけばかりに箸をつけて茶さえゆるりとは飲まず、お吉、十兵衛めがところにちよつと行て来る、行違^{ちが}いになつて不在^{るす}へ来^こば待たしておけ、と云う言葉さえとげとげしく怒りを含んで立ち出でかかれれば、氣にはかかれど何とせん方もなく、女房は送つて出したる後にて、ただ溜^た息^{めいき}をするのみなり。

其十三

決して開きかぬる雨戸にひとしお源太は癩癩の火の手を亢らせつつ、力まかせにがちが
 ち引き退け、十兵衛家にか、と云いさまにつとはいれば、声色知ったるお浪早くもそれ
 と悟つて、恩あるその人の敵に今は立ち居る十兵衛に連れ添える身の面を対すこと辛く、
 女気の纖弱くも胸をどきつかせながら、まあ親方様、とただ一言我知らず云い出したるぎ
 り挨拶さえどきまぎして急には二の句の出ざるうち、煤けし紙に針の孔、油染みなんど
 多き行燈の小蔭に悄然と坐り込める十兵衛を見かけて源太にずっと通られ、あわてて火
 鉢の前に請ずる機転の遅鈍も、正直ばかりで世態を知悉まぬ姿なるべし。

十兵衛は不束に一礼して重げに口を開き、明日の朝参上ろうとおもっております、
 といえはじろりとその顔下眼に睨み、わざと泰然たる源太、おお、そういう其方のつも
 りであつたか、こつちは例の気短ゆえ今しがたまで待つていたが、いつになつて汝の来る
 か知れたことではないとして出かけて来ただけ馬鹿であつたか、ハハハ、しかし十兵衛、
 汝は今日の上人様のあのお言葉をなんと聞いたか、兩人でよくよく相談して来よと云われ
 た揚句に長者の二人の児のお話し、それでわざわざ相談に来たが汝も大抵分別はもう定め
 て居るであらう、我も随分虫持ちだが悟つて見ればあの譬論の通り、尖りあうのは互に
 つまらぬこと、まんざら敵同士でもないに身勝手ばかりは我も云わぬ、つまりは和熟した

決定けつじようのところが欲しいゆえに、我欲は充分折くたつて擯くたいて思案を凝くたらして来たものの、

なお汝の了見も腹藏はらぞうのないところを聞きたく、その上にまたどうともしようと、我も男児おとこなりや汚きたない謀計たくみを腹には持たぬ、真実ほんとにこうおもて来たわ、と言葉をしばしとどめて十

兵衛が顔を見るに、俯伏うつむいたままだはい、はいと答うるのみにて、乱鬢らんびんの中に五六本

の白髪しらがが瞬またたく燈火あかりの光を受けてちらりちらりと見ゆるばかり。お浪ははや寝し猪いのの助が枕

の方かたについて坐まつて、呼吸いきさえせぬようこれもまた静まりかえり居ゐる淋さびしさ。かえつて遠く

に売りあるく鍋焼鰻うしんの呼び声こゑの、幽かすかに外方そとより家やの中に浸うちみこみ来たるほどなりけり。

源太はいよいよ氣を静め、語気なだらかに説いき出だすは、まあ遠慮もなく外見みえもつくらず

我の方あたから打ち明けようが、なんと十兵衛こうしてはくれぬか、せっかく汝も望みをかけ

天晴あつぱれ名譽の仕事をして持もつたる腕の光をあらわし、欲徳ではない職人の本望を見事に遂

げて、末代に十兵衛という男が意おも匠いぶり細工こぎぶりこれ視みて知れと残そうつもりであろ

うが、察しもつこう我とてもそれは同じこと、さらにあるべき普請ではなし、取り外はぐつて

は一生にまた出逢うことはおぼつかないなれば、源太は源太で我が意匠いさくぶり細工こぎぶりを是

非遺のこしたいは、理屈を自分のためにつけて云えば我はまあ感応寺の出入り、汝はなんの縁ゆかり

もないなり、我は先口、汝は後なり、我は頼まれて設計つもりまでしたに汝は頼まれはせず、他ひと

の口から云うたらばまた我は受け負うても相応、汝が身柄がらでは不相応と誰しも難をするであらう、だとして我が今理屈を味方にするでもない、世間を味方にするでもない、汝が手腕うでのありながら不幸せで居るというも知つて居る、汝が平素薄命ふだんふしあわせを口へこそ出さね、腹の底ではどのくらい泣いて居るというも知つて居る、我を汝の身にしては堪忍がまんのできぬほど悲しい一生というも知つて居る、それゆえにこそ去年一昨年なんにもならぬことではあるが、まあできるだけの世話はしたつもり、しかし恩に被きせるとおもうてくれるな、上人様だとして汝の清潔きれいな腹の中をお洞察みとおしになつたればこそ、汝の薄命ふしあわせを気の毒とおもわれたればこそ今日のようなお諭し、我も汝が欲かなんぞで対岸むこうにまわる奴ならば、私の仕事に邪魔を入れる猪口才ちよこざいな死節野郎しにぶしやろうと一斬ひとちやうなに脳天打ぶつ欠かずにはおかぬが、つくづく汝の身を察すればいっそ仕事もくれないような気のするほど、というて我も欲おれは捨て断れぬ、仕事は真実どうあつてもしたいわ、そこで十兵衛、聞いてももらいにくく云うても退けにくい相談じゃが、まあこうじゃ、堪忍して承知してくれ、五重塔は二人で建ちよう、我を主にして汝不足でもあらうが副そえになつて力を仮してはくれまいか、不足ではあらうが、まあ厭でもあらうが源太が頼む、聴いてはくれまいか、頼む頼む、頼むのじゃ、黙つて居るのは聴いてくれぬか、お浪さんも我の云うことのわかつたならどうぞ口を副そえて

聴いてもらつては下さらぬか、と脆くも涙になりいる女房にまで頼めば、お、お、親方様、ええありがとうござりまする、どこにこのような御親切の相談かけて下さる方のまたあらうか、なぜお礼をば云われぬか、と左の袖は露時雨、涙に重くなしながら、夫の膝を右の手で揺り動かしつ掻き口説けど、先刻より無言の仏となりし十兵衛何ともなお言わず、再度三度かきくどけど黙黙としてなお言わざりしが、やがて垂れたる首を抬げ、どうも十兵衛それは厭でござりまする、と無愛想に放つ一言、吐胸をついて驚く女房。なんと、と一声烈しく鋭く、頸首反らす一二寸、眼に角たててのつそりをまつ向よりして瞰下す源太。

其十四

人情の花も失くさず義理の幹もしつかり立てて、普通のものにはできざるべき親切の相談を、一方ならぬ実意のあればこそ源太のかけてくれしに、いかに伐つて抛げ出したような性質がさする返答なればとて、十兵衛厭でござりまするとはあまりなる挨拶、他の情愛のまるでわからぬ土人形でもこうは云うまじきを、さりとは恨めしいほど没義道な、

口惜しいほど無分別な、どうすればのように無奈なる夫の了見と、お浪は呆れもし驚き
 もしわが身の急に絞木しめぎにかけて絞めらるるとき心地のして、思わず知らず夫にすり寄り、
 それはまあなんとということ、親方様があれほどにあなたのためを計って、見るかげ
 もないこの方連れ、云わば一足に蹴落しておしまいなさることもなさらばできるこの方
 連れに、大抵ではないお情をかけて下され、御自分一人でなさりたい仕事をも分けてやろ
 う半口乗せてくりようと、身に浸みるほどありがたい御親切の御相談、しかもお招喚よびつけに
 でもなつてでのことか、坐蒲団ざぶとんさえあげることのならぬこのようなどころへわざわざおい
 でになつてのお話し、それを無にしてもつたいたい、十兵衛厭でござりまするとは冥利みょうり
 の尽きた我儘勝手わがまま、親方様の御親切の分らぬはずはなかりうに胴欲なも無遠慮なも大方
 程度ほどあいのあつたもの、これこの妾わたしの今着て居るのも去年の冬の取りつきに、恰あわせずがた姿の寒げ
 なを気の毒がられてお吉様の、縫直なほして着よと下されたのとは汝おまえの眼には暎らぬか、一方
 ならぬ御恩を受けていながら親方様の対岸むこうへ廻るさえあるに、それを小癩こしやくなとも恩知ら
 ずなともおつしやらず、どこまでも弱い者を愛護かほうて下さるお仁慈深い御分別にも頼より縋すが
 らいで一概に厭じやとは、たとえば真底から厭にせよ、記ものおぼえ臆ひとのある人間の口から出せた
 言葉でござりまするか、親方様の手前お吉様の所思おもわくをもよくとつくりと考えて見て下さ

れ、妾はもはやこれから先どの顔さげてあつかましくお吉様のお眼にかかることとなるものぞ、親方様はお胸の広うて、ああ十兵衛夫婦はわけの分らぬ愚か者なりや是も非もないと、そのまま何とも思しめされずただ打ち捨てて下さるか知らねど、世間は汝を何と云おう、恩知らずめ義理知らずめ、人情解せぬ畜生め、あれ奴は犬じや鳥じやと万人の指甲に弾かれものとなるは必定、犬や鳥と身をなして仕事をしたとて何の功名、欲をかわくな齷齪するなど常々妾に諭された自分の言葉に対しても恥かしゆうはおもわれぬか、どうぞ柔順に親方様の御異見について下さりませ、天に聳ゆる生雲塔は誰々二人で作つたと、親方様ともろともに肩を並べて世に称わるれば、汝の苦勞の甲斐も立ち親方様のありがたいお芳志も知るる道理、妾もどのようなに嬉しかるか喜ばしかるか、もしそうなれば不足というは薬にしたくもないはずなるに、汝は天魔に魅られてそれをまだまだ不足じやおもわるるのか、ああ情ない、妾が云わずと知れている汝自身の身のほどを、身の方際を忘れてか、と泣き声になり搔き口説く女房の頭は低く垂れて、鬘にさされし縫針の孔が啣えし一条の糸ゆらゆらと振うにも、千々に碎くる心の態の知られていとどいじらしきに、眼を瞑ぎいし十兵衛は、その時例の濁声出し、喧しいわお浪、黙っていよ、我話しの邪魔になる、親方様聞いて下され。

其十五

思おもいの中に激うすればや、じたじたと慄ふるい出す膝ひざの頭かしらをしつかと寄せ合あわせて、その上に
 両手もろて突つ張り、身を固くくして十兵衛は、情なさない親方様、二人でしようとは情なさない、十兵衛
 に半分仕事を譲ゆづつて下さりようとはお慈悲あきのようで情なさない、厭いとでござります、厭いとでござり
 ます、塔の建てたいは山々でももう十兵衛は断念あきらめております、お上人様のお諭たましを聞
 いてからの帰り道すっぱり思おもいあきらめました、身のほどにもない考えを持ったが間違まちがい、
 ああ私が馬鹿でござりました、のっそりはどこまでものっそりで馬鹿にさえなつて居ゐれば
 それでよいわけ、溝板どぶいたでもたたいて一生を終はりましょう、親方様堪か忍にして下くだされ我わたしが悪
 い、塔を建たちようとはもう申しませぬ、見みず知らずの他の人ではなし御恩ごおんになつた親方様
 の、一人で立派に建てらるるをよそながら視みて喜よろこびましょう、と元氣なげに云いい出でづるを
 走り氣きの源太ゆるりとは聴きいていず、ずいきさまと身を進すすめて、馬鹿を云いえ十兵衛、あまり道理
 が分わらな過ぎる、上人様のお諭たましは汝きさま一人に聴きけというてなされたではない我われが耳みみにも入
 れられたは、汝の腹はらでも聞きいたらば我の胸むねでも受け取とつた、汝一人に重石おもしを背負しよつてそう

沈まれてしもうては源太が男になれるかやい、つまらぬ思案に身を退いて馬鹿にさえなつて居ればよいとは、分別が摯実^{くすみ}過ぎて至^{もつとも}当とは云われまいぞ、おおそうならば我がすると得たりかしこで引き受けては、上人様にも恥かしく第一源太がせっかく磨^{みが}いた俠氣^{おとこ}もそこで廢^{すた}つてしまふし、汝はもとより虻^{あぶはち}蜂取らず、知恵のないにもほどのあるもの、そしては二人が何よかろう、さあそれゆえに美しく二人で仕事をしようというに、少しは氣ま^ずいところがあつてもそれはお互い、汝が不足なほどにこつちにも面白くないのあるは知れきつたことなれば、双方忍耐^{がまん}しあうとして忍耐のできぬわけはないはず、何もわざわざ骨を折つて汝が馬鹿になつてしまひ、幾日の心配を煙と消^きやし天晴れな手腕^{うで}を寢せ殺しにするにも当らない、のう十兵衛、我の云うのが腑に落ちたら思案をがらりとし變えてくれ、源太は無理は云わぬつもりだ、これさなぞ黙つて居る、不足か不承知か、承知してはくれないか、ええ我の了見をまだ呑み込んでくれないか、十兵衛、あんまり情ないではないか、何とか云うてくれ、不承知か不承知か、ええ情ない、黙つて居られてはわからない、我の云うのが不道理か、それとも不足で腹立ててか、と義には強くて情には弱く意地も立つれば親切も飽くまで徹^{とお}す江戸ツ子腹の、源太は柔和^{やさし}く問いかくれば、聞き居るお浪は嬉しさの骨身に浸みて、親方様あありますがとうござりますると口には出さねど、舌よりも真^ま

實を語る涙をば溢らす眼に、返辞せぬ夫の方を氣遣いて、見れば男は露一厘身動きなさず
 無言にて思案の頭重く低れ、ぼろりぼろりと膝の上に散らす涙珠の零ちて声あり。

源太も今は無言となりしばらくひとり考えしが、十兵衛汝はまだわからぬか、それとも
 不足とおもうのか、なるほどせっかく望んだことを二人でするのは口惜しかろ、しかも源太
 を心にして副になるのは口惜しかろ、ええ負けてやれこうしてやろう、源太は副になつて
 もよい汝を心に立てるほどに、さあさあ清く承知して二人でしようと合点せい、と己が望
 みは無理に折り、思いきつてぞ云い放つ。とツとんでもない親方様、たとえば十兵衛氣が狂
 えばとてどうしてそうはできますものぞ、もつたいたい、とあわてて云うに、そうなら我
 の異見につくか、とただ一言に返されて、それは、と窮るをまた追っかけ、汝を心に立て
 ようか乃至それでも不足か、と烈しく突かれて度を失う傍にて女房が氣もわくせき、親方
 様の御異見になぜまあ早く付かれぬ、と責むるがごとく恨みわび、言葉そぞろに勧めれば
 十兵衛ついに絶体絶命、下げたる頭を徐かに上げ円つぶらまなこの眼を剥き出して、一ツの仕事しごとを二人
 でするは、よしや十兵衛心になつても副になつても、厭なりやどうしてもできません、親
 方一人でお建てなされ、私は馬鹿で終りまする、と皆まで云わせず源太は怒って、これほ
 ど事を分けて云う私の親切を無にしてもか。はい、ありがとうはござりまするが、虚言は

申せず、厭なりやできませんぬ。おのれ汝よく云った、源太の言葉にどうでもつかぬか。是非ないことでござります。やあ覚えていよこののつそりめ、ひと他の情の分らぬ奴、そのようこと云えた義理か、よしよし汝に口は利かぬ、一生溝どぶでもいじつて暮せ、五重塔は氣の毒ながら汝に指もささせまい、源太一人で立派に建てる、ならば手柄に批点てんでも打て。

其十六

えい、ありがとうございます、滅法界に酔いました、もう飲いけやせぬ、と空辞誼そらじぎはうるさいほどしながら、猪口ちよくもつ手を後へは退ひかぬがおかしき上戸じょうこの常態つね、清吉はや馳走酒ちそうざけに十分酔つたれど遠慮に三分の真面目をとどめて殊勝らしく坐り込み、親方の不在るすにこう爛醉へべでは済みませぬ、姉御と対酌さしでは夕暮を躍おどるようになってもなりませんからな、アハハむやみに嬉しくなつて来ました、もう行きましよう、はめを外はずすと親方のお眼玉だ、だがかし姉御、内の親方には眼玉を貰もらつても私は嬉わっちしいとおもっています、なにも姉御の前だからとて軽薄を云うではありませぬが、真実ほんとに内の親方は茶袋よりもありがたいとおもっています、いつぞやの凌雲院りょううんいんの仕事の時も鉄や慶けいを対むこうにしてつまらぬことから

喧嘩^{けんか}を初め、鉄が肩先へ大怪我をさしたその後で鉄が親から泣き込まれ、ああ悪かった気の毒なことをしたと後悔してもこつちも貧^ひ的、どうしてやるにもやりようなく、困りきつて逃亡^{かけおち}とまで思つたところを、黙^{もく}つて親方から療治手当もしてやつて下された上、かけら半分叱^こ言^ごらしいことを私に云われず、ただ物^{もの}和^やしく、清^{てい}や汝^{めえ}喧嘩は時のはずみで仕方はないが気の毒とおもつたら謝罪^{あやま}つておけ、鉄が親の気持もよかろし汝の寢覚めもよいというものだ^なと心づけて下すつたその時は、ああどうしてこんな^{なさけ}に仁慈^{じんじ}深^{ふか}かるとありがたくてありがたくて私は泣きました、鉄に謝罪^{あやま}るわけはないが親方の一言に堪忍^{がまん}して私も謝罪^{あやま}りに行きましたが、それから異^おなもの^つでいつとなく鉄とは仲好しになり、今ではどつちにでもひよつとしたことのあれば骨^こを拾^{ひろ}つてやろうかもらおうかというぐらいの交際^{つきあい}になつたも皆親方のお蔭^{かげ}、それに引き変^かえ茶袋^{あそび}なんぞはむやみに叱言^こを云うばかりで、やれ喧嘩をするな遊興^{あそび}をするなとくだらぬことを小うるさく耳^{はた}の傍^{はた}で口説^{くち}きます、ハハハイやはや話になつたものではありません、え、茶袋とは母^{おふくろ}親^{おや}のことです、なに酷^{ひど}くはありませんぬ茶袋でたくさんです、しかも洩^もをひいた番茶の方です、あッハハハ、ありがとうござります、もう行きましょう、え、また一本爛^{つつ}けたから飲んで行けとおっしゃるのですか、ああありがたい、茶袋だと此方^{こち}で一本というところを反対^{あべこべ}にもう廃^よせと云いますわ、ああ

好い心持になりました、歌いたくなりましたな、歌えるかとは情ない、松づくしなどはあいつに賞められたほ^ほどで、と罪のないことを云えばお吉も笑いを含んで、そろそろ惚^{のろけ}気は恐ろしい、などと調戯^{からか}い居るところへ帰つて来たりし源太、おおちようどよい清吉いたか、お吉飲もうぞ、支度させい、清吉今夜は酔い潰^{つぶ}れる、胴魔声の松づくしでも聞いてやろ。
や、親方立聞きして居られたな。

其十七

清吉酔うてはしまりなくなり、砕けた源太が談話^{はなし}ぶり捌^{さば}けたお吉が接待^{とりなし}ぶりにいつしか遠慮も打ち忘れ、擬^さされて辞^{いな}まず受けてはつと干^ほし酒^{さかすき}盞^{さん}の数重ぬるままに、平常^{つね}から可愛らしき紅^{あか}ら顔を一層みずみずと、実の熟^いった丹波王母珠^{ほおずき}ほど紅うして、罪もなき高笑いやら相手もなしの空^{から}示威^{しきみ}、朋輩の誰の噂^{うわさ}の噂、自己^{おのれ}が仮^{こわい}声のどこそこで喝采^{やんや}を獲たる自慢、奪^あられぬ奪^あられるの云い争いの末何楼^{なにな}の獅顔^{しかみ}火鉢^{ひばち}を盗り出さんとして朋友^{ともだち}の仙の野郎が^{おおしくじり}大失策をした話、五十間で地廻りを擲^なつたことなど、縁に引かれ図に乗ってそれからそれへと饒舌^{しゃべ}り散らすうち、ふとのつそりの噂に火が飛べば、とろりとなりし眼

を急に見張つて、ぐにやりとしていし肩を聳^そだて、冷とうなつた飲みかけの酒を異^おしく唇
 まげながら吸い干し、一体あんな馬鹿野郎を親方の可愛^わがるというが私^わには頭^{てん}からわかり
 ませぬ、仕事といえは馬鹿丁寧で捗^はびは一向つきはせず、柱一本鵬居^{しきい}一ツで嘘をいえは鉋^{かん}
 を三度も礪^とぐような緩慢^{のろま}な奴、何を一ツ頼んでも間に合^あつた例^{ためし}がなく、赤松の炬^{ろう}縁^{ぶち}一ツに
 三日の手間を取るといふのは、多方ああいふ手合だろうと仙が笑つたも無理はありません、
 それを親方が鼯^{ひいき}にしたので一時は正直のところ、済みませんが私も金^{きん}も仙も六も、あ
 まり親方の腹が大きすぎてそれほどもないものを買^かい込み過ぎて居るではないか、念入
 りばかりで氣に入るなら我^{われ}たちもこれから羽目板にも仕上げ鉋^{がん}、のろりのろりとしたたか
 清めて碁盤^{ごばん}肌^{はだ}にでも削ろうかと癖^{ひが}みを云つたこともありましたが、第一あいつは交際^{つきあい}知^ち
 らずで女郎買^みい一度一所にせず、好鬪^{しやもな}鶏鍋^{なべ}つき合つたこともない唐偏^{とうへん}朴^{ぼく}、いつか大師^{だいし}
 へ一同^{みんな}が行く時も、まあ親方の身辺^{まわり}について居るものを一人ばかり仲間はずれにするでも
 ないと私が親切に誘つてやつたに、我は貧乏で行かれないと云つたきりの挨拶^{あいさつ}は、なん
 と愛想も義理も知らな過ぎるではありませんか、錢がなければ女房^かの一枚着を曲げ込んで
 も交際は交際^{つきあい}で立てるが朋友^{ともだち}づく、それもわからない白痴^{たわけ}の癖に段々親方の恩を被^きて、
 私や金と同じことに今ではどうか一人立ち、しかも憚^{はば}りながら青^{あお}つ涕^{ばな}垂^たらして弁当箱の持

運び、木片こつぱを担いでひよろひよろ帰る餓鬼がきのころから親方の手についていた私や仙とは違
つて奴は渡り者、次第を云えば私らより一倍深く親方をありがたい忝かたじけないと思つていなけ
りやならぬはず、親方、姉御、私は悲しくなつて来ました、私はもしものことがあれば親
方や姉御のためと云や黒煙あおの煽りを食つても飛び込むぐらいの了見は持つて居るに、畜生
ッ、ああ人情なさけない野郎め、のっそりめ、あいつは火の中へは恩を背負しよつても入りきるまい、
ろくな根性はもつていまい、ああ人情ない畜生めだ、と酔いが図らず云い出せし不平の中
に潜り込んで、めそめそめそ泣き出せば、お吉は夫の顔を見て、例いつもの癖が出て来たか
と困つた風情はしながらも自己の胸にもものっそりの憎さがあれば、幾らかは清が言葉を道も
つとも理と聞く傾きもあるなるべし。

源太は腹に戸締りのなきほど愚おろかならざれば、猪口ちよくを擬さしつけ高笑いし、何を云い出し
た清吉、寝ぼけるな我の前だわ、三の切を出しても初まらぬぞ、その手で女でも口説きや
れ、随分ころりと来るであろう、汝きさまが惚のろけた小蝶こちようさまのお部屋ではない、アツハハハと
戯言おどけを云えばなお真面目に、木き珠ずほどの涙を払うその手をべたりと刺身皿さしみざらの中につつ
こみ、しやくり上げ戯しやくりあげ歎なげして泣き出し、ああ情ない親方、私を酔よつぱら漢いあしらいは情
ない、酔つてはいませぬ、小蝶なんぞは飲たべませぬ、そういえばあいつの面つらがどこかのつ

そりに似て居るようで口惜しくて情ない、のっそりは憎い奴、親方の対^{むこ}うを張つて大それた、五重の塔を生意気にも建てようなんとは憎い奴憎い奴、親方が和^{やさ}し過ぎるので増長した謀反人め、謀反人も明智^{あけち}のようなは道理^{もつとも}だと伯^{はくりゆう}龍^{りゆう}が講釈しましたがあいつのようなは大悪無道^{ぶどう}、親方はいつのっそりの頭を鉄扇で打ちました、いつ蘭丸^{らんまる}にのっそりの領地を与^やると云いました、私は今にもしもあいつが親方の言葉に甘えて名を列^{なら}べて塔を建てれば打捨^{うちや}つてはおけませぬ、擲^たき殺して狗^{いぬ}にくれますこういうように擲き殺して、と明^あ徳利^{きどくり}の横面いきなり打^{たた}き飛^たばせば、碎片^{かけら}は散つて皿小鉢^{わど}跳り出すやちんからり。馬鹿野郎め、と親方に大喝されてそのままにぐずりと坐^{すわ}りおとなしく居るかと思えば、散らかりし還原海苔^{もどしのり}の上に額おしつけはや鼾^{いびき}声なり。源太はこれに打ち笑い、愛嬌のある阿呆^{おこ}めに搔^かきかけてやれ、と云いつつ手酌にぐいと引かけて酒気を吹くことやや久しく、怒^{おこ}つて帰つて来はしたもののああでは高が清吉同然、さて分別がまだ要^いるわ。

其十八

源太が怒つて帰りし後、腕拱^{こまぬ}きて茫然^{ぼうぜん}たる夫の顔をさし覗^{のぞ}きて、吐息つくづくお浪は歎

じ、親方様は怒らする仕事はつまり手に入らず、夜の眼も合わさず雛形ひながたまで製造こしらえた幾日の骨折りも苦勞も無益むだにした揚句の果てに他の氣持ひとを悪うして、恩知らず人情なしと人の口端にかかるのはあまりといえば情ない、女の差し出たことをいうとただ一口に云わるるか知らねど、正直律義りちぎもほどのあるもの、親方様があれほどに云うて下さる異見について一緒にしたとて恥辱はじにはなるまいに、偏僻かたいじ張はつてなんのつまらぬ意氣地立て、それを誰が感心なと褒めほめましょう、親方様の御料簡につけば第一御恩ある親方のお心持もよいわけ、またお前の名も上り苦勞骨折りの甲斐も立つわけ、三方四方みな好いになぜその気にはならぬか、少しもお前の料簡わたくしが妾の腹には合点のみこめぬ、よくまあ思案し直して親方様の御異見について従うては下されぬか、お前が分別さえ更かえれば妾がすぐにも親方様のところへ行き、どうかこうにか謝罪あやまり云うて一生懸命精一杯、打ぶたれても擲たかれても動くまいほど覺悟をきめ、謝罪あやまりつて謝罪あやまりつて謝罪あやまり貫ぬいたらお情深い親方様が、まさかにいつまで怒つてばかりも居られまい、一時の料簡違ひは堪忍か忍にして下さることもあろう、分別しかえて意地張はらずに、親方様の云われた通りして見る気にはならぬか、と夫思ひの一筋に口説くも女の道理もつともなれど、十兵衛はなお眼も動かさず、ああもう云うてくれるな、ああ、五重塔とも云うてくれるな、よいしないことを思いたつてなるほど恩知らずとも云わりよう人情

なしとも云わりよう、それも十兵衛の分別が足りないででかしたこと、今さらなんとも是非
 がない、しかし汝きさまの云うように思案しかえるはどうしても厭、十兵衛が仕事に手下は使お
 うが助言じょごんは頼むまい、人の仕事の手下になつて使われはしようが助言はすまい、櫛組ますぐみ
 も椽配たるきわりも我がする日には私の勝手、どこからどこまで一寸たりとも人の指揮さしずは決して
 受けぬ、善いも悪いも一人で背負しよつて立つ、他の仕事に使われればただ正直の手間取りと
 なつて渡されただけのことするばかり、生意氣な差し出口は夢にもすまい、自分が主でも
 ない癖に自己おのが葉色を際立てて異かわつた風を誇り顔ほこの寄生木は十兵衛の虫が好かぬ、人の仕
 事に寄生木となるも厭ならわが仕事に寄生木を容いるも虫が嫌えば是非がない、和やしい源
 太親方が義理人情を噛かみ砕いてわざわざ懲す憑すめて下さるは我にもわかつてありがたいが、な
 まじい私の心を生かして寄生木あしらいは情ない、十兵衛は馬鹿でものつそりでもよい、
 寄生木になつて栄えるは嫌いじゃ、矮小けいちな下草になつて枯れもしよう大樹おおきを頼まば肥料こやしに
 もなろうが、ただ寄生木になつて高く止まる奴らを日ごろいくらも見ては卑しい奴めと心
 中で蔑視みさげていたに、今我が自然親方の情に甘えてそれになるのはどうあつても小恥かし
 ゆうてなりきれぬわ、いつそのことに親方の指揮さしずのとおりこれを削れあれを挽ひき割れと使
 わるるなら嬉しけれど、なまじ情がかえつて悲しい、汝も定めてわからぬ奴と恨みもしよ

うが堪^{かに}忍^にしてくれ、ええ是非がない、わからぬところが十兵衛だ、ここがのつそりだ、馬鹿だ、白痴^{たわけ}漢だ、何と云われても仕方はないわ、ああッ火も小さくなつて寒うなった、もうもう寝てでもしまおうよ、と聴^きけば一々道理の述懐。お浪もかえす言葉なく無言となれば、なお寒き一室^{ひとま}を照らせる行燈^{あんどん}も灯花^{ちやうじ}に暗うなりにけり。

其十九

その夜は源太床に入りてもなかなか眠らず、一番^{いちばん}鶏^{どり}二番鶏^{どり}を耳たしかに聞いて朝も平^つ日^ねよりははよう起き、含嗽^{うがい}手水^{いちようず}に見ぬ夢を洗つて熱茶一杯に酒の残り香を払う折しも、むくむくと起き上つたる清吉^{せいきち}寢惚^{ねぼれ}眼^めをこすりこすり怪訝^{けげん}顔^{がお}してまごつくに、お吉ともども噴飯^{ふきだ}して笑ひ、清吉^{せいきち}昨夜^{ゆうべ}はどうしたか、と勦^{なぶ}れば急にかしこまって無茶苦茶に頭を下げ、つい御馳走になり過ぎていつか知らず寝てしまいました、姉御、昨夜^{わっち}私^{わたし}は何か悪いことでもしはしませぬか、と心配そうに尋ぬるもおかしく、まあ何でも好いわ、飯でも食つて仕事に行きやれ、と和^{やさ}しく云われてますます畏^{おそ}れ、恍然^{うっとり}として腕を組みしきりに考え込む風情^{ふぜい}、正直なるが可愛らし。

清吉を出しやりたる後、源太はなおも考えにひとり沈みて日ごろの快活さつぱりとした調子に
 似もやらず、ろくろくお吉に口さえきかで思案に思案を凝らせしが、ああわかったと独りひと
 言ごとするかと思えば、愍然ふびんなと溜息つき、ええ抛なげようかと云うかとおもえば、どうしてく
 りようと腹立つ様子を傍にてお吉の見る辛さ、問い慰めんと口を出いだせば黙だまつていよとやり
 こめられ、詮せん方かたなきに胸の中にて空しく心をいたむるばかり。源太はそれらに関かまいもせ
 ず夕暮方まで考え考え、ようやく思い定めやしけんつと身を起して衣服をあらため、感応
 寺に行き上人に見まえて昨夜の始終をば隠ますことなく物語りし末、一旦は私もあまりわから
 ぬ十兵衛の答えに腹を立てしものの帰つてよくよく考うれば、たとえば私一人して立派に
 塔は建つるにせよ、それではせつかくお論さとしを受けた甲斐なく源太がまた我欲にばかり強
 いようで男児おとこらしゆうもない話し、というて十兵衛は十兵衛の思わくを滅多に捨てはすま
 じき様子、あれも全く自己おのれを押えて譲れば源太も自己を押えてあれに仕事をさせ下されと
 譲らねばならぬ義理人情、いろいろ愚かな考えを使つてようやく案じ出したことにも十兵
 衛が乗らねば仕方なく、それを怒つても恨んでも是非のないわけ、はやこの上には変つた
 分別も私には出ませぬ、ただ願うはお上人様、たとえば十兵衛一人に仰せつけられますれ
 ばとて私かならず何とも思いますまいほどに、十兵衛になり私になり二人ともどもになり

どうとも仰せつけられて下さりませ、御口ずからのことなれば十兵衛も私も互いに争う心は捨てておりまするほどに露さら故障はござりませぬ、我ら二人の相談には余つて願ひにまいりました、と実意を面に現わしつつ願えば上人ほくほく笑われ、そうじやろそうじやろ、さすがに汝も見上げた男じや、よいよい、その心がけ一つでもう生雲塔見事に建てたより立派に汝はなつておる、十兵衛も先刻に來て同じことを云うて歸つたわ、あれも可愛い男ではないか、のう源太、可愛がつてやれ可愛がつてやれ、と心ありげに云わるる言葉を源太早くも合点して、ええ可愛がつてやりますとも、といと清しげに答うれば、上人満面皺にして悦びたまいつ、よいわよいわ、ああ氣味のよい男児じやな、と真から底からほめられて、もったいなさはありながら源太おもわず頭をあげ、お蔭で男児になりましたか、と一語に無限の感慨を含めて喜ぶ男泣き。はやこの時に十兵衛が仕事に助力せん心の、世に美しくも湧きたるなるべし。

其二十

十兵衛感応寺にいたりて朗円上人に見え、涙ながらに辞退の旨云うて歸りしその日の味

気なき、煙草のむだけの氣も動かすに力なく、茫然ぼんやりとしてつくづくわが身の薄命ふしあわせ、
 浮世の渡りぐるしきことなど思い廻めぐらせば思い廻らすほど嬉うれしからず、時刻になりて食う
 飯の味が今さら異かわれるではなけれど、箸持はしつ手さえ躊躇たゆたいがちに舌が美味うもうは受けとら
 ぬに、平常つねは六碗七碗を快くう喫いしもわずかに一碗二碗で終え、茶ばかりかえつて多く飲
 むも、心に不悦ますさのある人の免れがたき慣例ならいなり。

主人あるじが浮かねば女房も、何の罪なきやんちやざかりの猪いの之まで自然おのずと浮き立たず、淋さびし
 き貧家のいとど淋しく、希望のぞみもなければ快樂たのしみも一点あらで日を暮らし、暖か味のない夢
 に物寂ものさびた夜を明かしけるが、お浪曉あかつき天の鐘に眼覚めて猪之と一所に寝たる床よりそつ
 と出づるも、朝風の寒いに火のないうちから起すまじ、もう少し睡ねさせておこうとの慈やさしき
 親の心なるに、何もかも知らいでたわいなく寝ていし平生いっしょとは違い、どうせしことやらた
 ちまち飛び起き、襦袢じゆばん一つで夜具の上跳ね廻り跳ね廻り、厭じやい厭じやい、父様を打ぶ
 つちや厭じやい、と蕨わらびのような手を眼にあてて何かは知らず泣き出せば、ええこれ猪之は
 どうしたもので、とびつくりしながら抱き止むるに抱かれながらも泣き止まず。誰も
 父様を打ちはしませぬ、夢でも見たか、それそこに父様はまだ寝て居らるゝ、と顔を押し
 向け知らすれば不思議そうに覗き込んで、ようやく安心しはしてもまだ疑うたが惑いの晴れぬ様

子。

猪之やなんにもありはしないわ、夢を見たのじゃ、さあ寒いに風邪をひいてはなりませぬ、床にはいつて寝て居るがよい、と引き倒すようにして横にならせ、掻巻かいまきかけて隙間すきまなきよう上から押しつけやる母の顔を見ながら眼をぱちり、ああ怖こわかった、今よその怖い人が。おゝおゝ、どうかしましたか。大きな、大きな鉄槌てんのうで、黙って坐って居る父様の、頭を打って幾つも打って、頭が半分砕こわれたので坊は大変びつくりした。ええ鶴亀鶴亀、厭なこと、延喜でもないことを云う、と眉まゆを皺しわむる折も折、戸外おもてを通る納豆売りの戦ふるえ声に覚えある奴が、ちエツ忌々いまいましい草鞋わらじが切れた、と打ち独語つぶやきて行き過ぐるに女房ますます氣色を悪あしくし、台所に出て釜かまの下を焚たきつくれば思うごとく燃えざる薪まきも腹立たしく、引窓すべの滑りよく明かぬも今さらのように焦じれたく、ああ何となく厭な日と思うも心からぞとは知りながら、なお氣になることのみ氣にすればにや多けれど、また云い出さば笑われんと自分で呵しかつて平日いつもよりは笑顔をつくり言葉にも活氣をもたせ、いきいきとして夫をあらしい子をあしらえど、根がわざとせし偽飾いつわりなればかえって笑いの尻声うれいが憂愁うれいの響きを遺して去る光景ありさまの悲しげなところへ、十兵衛殿お宅か、と押柄おうへいに大人びた口ききながらはいり来る小坊主、高慢にちよこんと上り込み、御用あるにつきすぐと来たら

れべしと前後あとさきなしの棒口上。

お浪も不審、十兵衛も分らぬことに思えども辞いなみもならねば、はや感応寺の門くぐるさ
え無益むやくしくは考えつつも、何御用ぞと行つて問えば、天地顛倒てんどうこりやどうじや、夢うつつか現
か真実か、円道右に為右衛門左に朗円上人中央まんなかに坐したもうて、円道言葉おごそかに、
このたび建立なるところの生雲塔の一切工事川越源太に任せられべきはずのところ、方丈
思おほしめし寄らることあり格別の御詮議例外の御慈悲をもつて、十兵衛その方ほうにしかとお
任せ相成る、辞退の儀は決して無用なり、早々ありがたく御受け申せ、と云い渡さるるそ
れさえあるに、上人皺枯れたる御声にて、これ十兵衛よ、思う存分し遂げて見い、よう仕
上らば嬉しいぞよ、と荷担になうに余る冥加みょうがの言葉。のっそりハツと俯伏うつぶせしまま五体を
濤なみと動ゆるがして、十兵衛めが生命いのちはさ、さ、さし出しまする、と云いしぎり咽塞のどづさがりて言語
絶え、岑閑しんかんとせし広座敷に何をか語る呼吸の響き幽かすかにしてまた人の耳に徹しぬ。

其二十一

紅蓮ぐれんぴやくれん白蓮はくれんの香においゆかしく衣袂たもとに裾すそに薰かおり来て、浮葉に露の玉動ゆらぎ立葉に風のそよ吹け

る面白の夏の眺望は、赤蜻蛉菱藻を颯り初霜向うが岡の樹梢を染めてより全然となくなつたれど、赭色になりて荷の茎ばかり情のう立てる間に、世を忍びげの白鷺がそろりと歩む姿もおかしく、紺青色に暮れて行く天にようやく輝り出す星を背中に擦つて飛ぶ雁の、鳴き渡る音も趣味ある不忍の池の景色を下物のほかの下物にして、客に酒をば亀の子ほど飲ます蓬萊屋の裏二階に、氣持のよさそうな顔して欣然と人待つ男一人。唐棧揃いの淡泊づくりに住吉張りの銀煙管おとなしきは、職人らしき俠氣の風のものいふ言語挙動に見えながら毫末も下卑ぬ上品質、いづれ親方親方と多くのものに立てらる棟梁株とは、かねてから知り居る馴染のお伝という女が、さぞお待ち遠でござりましょう、と膳を置きつつ云う世辞を、待つ退屈さに捕えて、待ち遠で堪りきれぬ、ほんとに人の氣も知らないで何をして居るであらう、と云えば、それでもお化粧に手間の取れますが無理はないはず、と云いさしてホホと笑う慣れきつた返しの太刀筋。アハハハそれも道理じゃ、今に來たらばよく見てくれ、まあ恐らくここに類はなからう、というものだ。おや恐ろしい、何を散財つて下さります、そして親方、というものは御師匠さまですか。いいや。娘さんですか。いいや。後家様。いいや。お婆さんですか。馬鹿を云え可愛そうに。では赤ん坊。こいつめ人をからかうな、ハハハハハ。ホホホホホとくだ

らなく笑うところへ襖ふすまの外から、お伝さんと名を呼んでお連れ様と知らずれば、立ち上つて唐紙明けにかかりながらちよつと後ろ向いて人の顔へ異おつに眼をくれ無言で笑うは、お嬉しかろと調戯からかつて焦じらして底悦喜そこえつきさする冗談なれど、源太はかえつて心しんからおかしく思うとも知らずにお伝はすいと明くれば、のろりと入り来る客は色ある新造しんぞどころか香も艶もなき無骨男、ぼうぼう頭髪あたまのぐりぐり腮髯ひげ、面かおは汚よごれて衣服きものは垢あかづき破れたる見るから厭氣のぞつとたつほどな様子に、さすがあきれて挨拶あいさつさえどぎまぎせしまま急には出ず。

源太は笑みを含みながら、さあ十兵衛ここへ来てくれ、関かまうことはない大胡坐おおあぐらで楽にいてくれ、とおずおずし居るを無理に坐すに居え、やがて膳部も具備そなわりし後、さてあらためて飲み干したる酒盃さかずきとつて源太は擬さし、沈黙だんまりで居る十兵衛に對むかい、十兵衛、先刻さつきに富と松みまつをわざわざ遣やつてこんなところに来てもらったは、何でもない、実は仲直りしてもらいたくてだ、どうか汝きさまとわつさり飲んで互いの胸を和熟させ、過日こないだの夜の我が云おれうたあの云い過ぎも忘れてもらいたいとおもうからのこと、聞いてくれかういうわけだ、過日の夜は実は我もあり汝をわからぬ奴と一途いちずに思つて腹も立つた、恥かしいが肝かん癪しやくも起おこし業ごうも沸にやし汝の頭を打碎ぶついてやりたいほどにまでも思うたが、しかし幸福しあわせに源太の頭が悪玉にばかりは乗つ取られず、清吉めが家へ来て酔つた揚句に云いちらした無茶苦茶を、

あ、あ、見のちさい奴はつまらぬことを理屈らしく恥かしくもなく云うものだ、聞いている
さえおかしくて堪たまらなさにふとそう思ったその途端、その夜汝の家で陳ならべ立って来た我の
云い草に気がついて見れば清吉が言葉と似たり寄ったり、ええ間違つた一時の腹立ちに捲ま
き込まれたか残念、源太男が廢すたる、意地が立たぬ、上人の蔑視さげすみも恐ろしい、十兵衛が何も
かも捨てて辞退するものを斜はすに取つて逆意さかいじ地たてれば大間違い、とは思つてもあまり汝の
わからな過ぎるが腹立たしく、四方八方どこからどこまで考えて、ここを推せばそこに璧ひ
ずみが出る、あすこを立てればここに無理があると、まあ我の知恵分別ありたけ尽して我の
ためばかり籌はかるではなく云うたことを、むげに云い消されたが忌々いまいましくて忌々しくて随
分堪忍がまんもしかねたが、さていよいよ了見きを定めて上人様のお眼にかかり所存を申し上げて
見れば、よいよいと仰せられたただの一言に雲霧もやもやはもうなくなつて、清すずしい風が天空を
吹いて居るような心持になつたわ、昨日はまた上人様からわざわざのお招きで、行つて見
たれば我を御賞美のお言葉数々のその上、いよいよ十兵衛に普請一切申しつけたが蔭かげにな
つて助けてやれ、皆汝そなたの善根福種になるのじや、十兵衛が手には職人もあるまい、彼あれがい
よいよ取りかかる日には何人いくらも傭やとうその中うちに汝が手下の者も交じろう、必ず猜忌そねみひがみ邪曲など
起さぬようにそれらには汝からよく云い含めてやるがよいとの細かいお諭さとし、何から何ま

で見透しでお慈悲深い上人様のありがたきにつくづく我折って帰って来たが、十兵衛、過
ないだ 日の云い過ごしは堪忍かにしてくれ、こうした私の心意気がわかつてくれたら従来いままで通り淨
むつ 睦まじく交際つきあつてもらおう、一切がこう定まって見れば何と思つた彼と思つたは皆夢の
 中の物詮議、後に遺のこして面倒こそあれ益やくないこと、この不忍の池水にさらりと流して我も
 忘りよう、十兵衛汝も忘れてくれ、木材きしなの引合い、鳶人足への渡りなんど、まだ顔を売り
 込んでいぬ汝にはちよつとしにくかるうが、それらには私の顔も貸そうし手も貸そう、丸
るちよう 丁、山六、遠州屋、いい問屋は皆馴染なじみでうては先方さきがこつちを呑んでならねば、
はがゆ 万事齒痒いことのないよう我を自由に出しに使え、め組の頭の鋭次えいじというは短気なは汝も
 知つて居るであろうが、骨は黒鉄くろがね、性根玉は憚りはばかながら火の玉だと平常云うだけ、さて
 じっくり頼めばぐつと引き受け一寸退のかぬ頼もしい男、塔は何より地行じぎようが大事、空風火
 水の四ツを受ける地盤の固めをあれにさせれば、火の玉鋭次が根性だけでも不動が台座の
 岩より堅く基礎いしずえしかと据すえさすると諸肌もろはだぬいでしてくるは必定ひつじよう、あれにもやが
ひきあわ て紹介しよう、もうこうなつた暁には源太が望みはただ一ツ、天晴れ十兵衛汝がよくし
 でかしさえすりやそれでよいのじや、ただただ塔さえよくできればそれに越した嬉しいこ
 とはない、かりそめにも百年千年末世に残つて云わば我たちの弟子筋の奴らが眼にも入る

ものに、へまがあつては悲しからうではないか、情ないではなからうか、源太十兵衛時代にはこんなくだらぬ建物に泣いたり笑ったりしたそうなど云われる日には、なあ十兵衛、二人が舍利も魂魄も粉灰にされて消し飛ばさるるわ、拙な細工で世に出ぬは恥もかえつて少ないが、遺したものを弟子めらに笑わる日には馬鹿親父が息子に異見さるると同じく、親に異見を食う子より何段増して恥かしかる、生き磔刑より死んだ後塩漬の上磔刑になるような目にあつてはならぬ、初めは我もこれほどに深くも思い寄らなんだが、汝が我の対面にたつたその意気張りから、十兵衛に塔建てさせ見よ源太に劣りはすまいというか、源太が建てて見せくりよう何十兵衛に劣ろうぞと、腹の底には木を鑽つて出した火で観る先の先、我意はなんにもなくなつただよくできてくれさえすれば汝も名誉我も悦び、今日はこれだけ云いたいばかり、ああ十兵衛その大きな眼を湿ませて聴いてくれたか嬉しいやい、と磨いて礪いで礪ぎ出した純粋江戸ツ子粘り気なし、一でなければ六と出る、怒の裏の温和さもあくまで強き源太が言葉に、身動きさえせで聞きいし十兵衛、何も云わず畳に食いつき、親方、堪忍して下され口がきけませぬ、十兵衛には口がきけませぬ、こ、この通り、ああありがとうござりまする、と愚かしくもまた真実にただ平伏して泣きいたり。

其二十二

言葉はなくても真情まことは見ゆる十兵衛が挙動そぶりに源太は悦び、春風湖みずを渡つて霞日かすみに蒸すともいうべき温和の景色を面にあらわし、なおもやさしき語氣なだらか円暢みずに、こう打ち解けてしもうた上は互いにまずいこともなく、上人様の思召おぼしめしにもかない我たちの一分いちぶんも皆立つというもの、あなんにせよ好い心持、十兵衛汝も過してくれ、我も充分今日こそ酔おう、と云いつつ立つて違い棚だなに載せて置いたる風呂敷包みとりおろし、結び目といて二束ふたつにせし書類かきものいだし、十兵衛が前に置き、我にあつては要なき此品これの、一ツは面倒な材木の委細きしなしい当りを調べたのやら、人足輕子かるこそのほかさまさまの入目を幾晩かかかつてようやく調べあげた積り書、また一ツはあすこをどうしてここをこうしてと工夫に工夫した下絵図、腰屋根の地割りだけなもあり、平地割りだけなもあり、初重の仕形だけのもあり、二手先または三手先、出し組ばかりなるもあり、雲形波形唐草からくさ生類しやうるい彫物のみを書きしもあり、何よりかより面倒なる真柱うちのりから内法なげし長押腰長押切目長押に半長押、縁え板縁んいたかつら亀腹柱高欄垂木桝肘木たるきますひじき、貫ぬきやら角木すみぎの割合算法、墨繩すみの引きよう規尺かねの取り

よう余さず洩らさず記せしもあり、中には我のせしならで家に秘めたる先祖の遺品、外へは出せぬ絵図もあり、京都やら奈良の堂塔を写しとりたるものもあり、これらはみんな汝に預くる、見たらば何かの足しにもなる、と自己が精神を籠めたるものを惜しげもなしに譲りあたうる、胸の広さの頼もしきを解せぬというにはあらざれど、のっそりもまた一気性、他の巾着でわが口濡らすようなことは好まず、親方まことにありがとうはござりまするが、御親切は頂戴いたも同然、これはそちらにお納めを、と心はさほどになけれども言葉に膠のなさ過ぎる返辞をすれば、源太大きに悦ばず。此品をば汝は要らぬと云うのか、と慍りを底に匿して問うに、のっそりそうとは氣もつかねば、別段拝借いたしても、と一句うつかり答うる途端、鋭き氣性の源太は堪らず、親切の上親切を尽してわが知恵思案を凝らせし絵図までやらんというものを、むげに返すか慮外なり、何ほど自己が手腕のよくて他の好情を無にするか、そもそも最初に汝めがわが対岸へ廻りし時にも腹は立ちしが、じつと堪えて争わず、普通大体のものならばわが庇蔭被たる身をもつて一つ仕事に手を入るるか、打ち擲いても飽かぬ奴と、怒って怒ってどうにもすべきを、可愛きものにおもえばこそ一言半句の厭味も云わず、ただただ自然の成行きに任せおきしを忘れしか、上人様のお諭しを受けての後も分別に分別渴らしてわざわざ出かけ、汝のために相談をか

けてやりしも勝手の意地張り、大体ならぬものとても堪忍がまんなるべきところならぬを、よく
 よく汝をいとしがればぞ踏み耐こたえたるとも知らざるか、汝が運のよきのみにて汝が手腕うでの
 よきのみにて汝が心の正直のみにて、上人様より今度の工しごと事命いのちけられしと思ひ居るか、此
 品れをばやつてこの源太が恩がましくでも思うと思うか、乃至ないしはもはや慢氣まきの萌きざして頭てんから
 なんのつまらぬものと人の絵図をも易く思うか、取らぬとあるに強いはせじ、あまりとい
 えば人情なき奴、ああありがとうござりますると喜び受けてこの中の仕様うちを一ひと所二ふた所
 は用いし上に、あの箇所はお蔭かげでうもう行きましたと後で挨拶あいさつするほどのことはあつて
 も当然なるに、開あけて見もせず覗のぞきもせず、知れきつたると云わぬばかりに愛想すげも菅すげもな
 く要らぬとは、汝十兵衛よくも撥はねたの、この源太がした図の中に汝の知つたもののみあ
 ろうや、汝うぬらが工風の輪の外に源太が跳わり出でずにあるうか、見るに足らぬとそちで思わば
 汝おのれが手筋も知れてある、大方高の知れた塔建たぬ前から眼うつつに暎うつつつて気の毒ながら批難なんもあ
 る、もう堪忍の緒も断きれたり、卑劣きたない返報かえしはすまいなれど源太が烈はげしい意趣返報がえしは、する
 時なさでおくべきか、酸くなるほどに今までは口もきいたがもうきかぬ、一旦思ひ捨すつる
 上は口きくほどの未練ももたぬ、三年なりとも十年なりとも返報しかえしするに充分なところのある
 まで、物蔭から眼を光らして睨にらみつめ無言でじつと待つててくりようと、氣性が違えば思

わくも一二度ついに三度めで無残至極に齟齬くいちがい、いと物静かに言葉を低めて、十兵衛殿と殿の字を急につけ出し叮嚀ていねいに、要らぬという図はしまいましょ、汝そなた一人で建つる塔定めて立派にできようが、地震か風のあるう時壊こわれることはあるまいな、と軽くは云えど深く嘲ける語ことばに十兵衛も快よからず、のっそりでも恥辱はじは知っております、と底力味ある楔くさびを打てば、なかなか見事な一言じや、忘れぬように記憶おぼえていようと、釘くぎをさしつつ恐ろしく睥にらみて後は物云わず、やがてたちまち立ち上つて、ああとんでもないことを忘れた、十兵衛殿ゆるりと遊んでいてくれ、我は帰らねばならぬこと思い出した、と風のごとくにその座を去り、あれという間に推量勘定、幾金いくらか遺してふいとおつ、すぐその足で同じ町のある家が闖しきいまたぐや否、厭だ厭だ、つまらぬくだらぬ馬鹿馬鹿しい、ぐずぐずせずと酒もて来い、蠟燭ろうそくいじつてそれが食えるか、鈍痴どじめ肴さかなで酒が飲めるか、小兼春こかねはる吉るきちお房蝶ふさちようこ子四の五の云わせず掴つかんで来い、臍すねの達者な若い衆頼も、我家うちへ行て清、仙鉄、政、誰でも彼でもすぐに遊びによこすよう、という片手間にぐいぐい仰飲あおる間もなく入り来る女どもに、今晚なぞとは手ぬるいぞ、とまつ向から焦躁じれを吹つけて、飲め、酒は車くるま懸がり、猪口ちよくは巴と廻せ廻せ、お房外見みえをするな、春婆大人ぶるな、ええお蝶めそれでも血が循環めぐつて居るのか頭上あたまに鼬花いたちはなび火載せて火をつくるぞ、さあ歌え、じゃんじゃ

んとやれ、小兼ね気持のいい声を出す、あぐり踊るか、かぐりもつと跳ねろ、やあ清吉来たか鉄も来たか、なんでもいい滅茶滅茶に騒げ、我に嬉しいことがあるのだ、無礼講にやれやれ、と大将無法の元気なれば、後れて来たる仙も政も煙に巻かれて浮かれたち、天井抜きようが根太抜きようが抜けたら此方のお手のものと、飛ぶやら舞うやら唸るやら、潮来出島もしおらしからず、甚句に関の声を湧かし、かつぽれに滑って転倒び、手品の太鼓を杯洗で鉄がたたけば、清吉はお房が傍に寝転んで銀釵にお前そのよに酔ばかり飲んでを稽古する馬鹿騒ぎの中で、一了簡あり顔の政が木遣を丸めたような声しながら、北に峨々たる青山をと異なことを吐き出す勝手三昧、やつちやもつちやの末は拳も下卑て、乳房の脹れた奴が臍の下に紙幕張るほどになれば、さあもうここは切り上げてと源太が一言、それから先はどこへやら。

其二十三

蒼の飛ぶ時よそ視はなさず、鶴なら鶴の一点張りに雲をも穿ち風にも逆つて目ざす獲物の、咽喉仏把攫までは合点せざるものなり。十兵衛いよいよ五重塔の工事するに定

まつてより寝ても起きてもそれ三昧、朝の飯喫うにも心の中では塔を噬み、夜の夢結ぶにも魂魄は九輪の頂を繞るほどなれば、まして仕事にかかつては妻あることも忘れ果て児のあることも忘れ果て、昨日の我を念頭に浮べもせず明日の我を想いもなさず、ただ一斬ふりあげて木を伐るときは満身の力をそれに籠め、一枚の図をひく時には一心の誠をそれに注ぎ、五尺の身体こそ犬鳴き鶏歌い権兵衛が家に吉慶あれば木工右衛門がところに悲哀ある俗世に在りもすれ、精神は紛たる因縁に奪られて必死とばかり勤め励めば、前の夜源太に面白からず思われしことの氣にかからぬにはあらざれど、日ごろののつそりまします長じて、はやいづくにか風吹きたりしぐらいに自然軽う取り做し、やがてはとんと打ち忘れ、ただただ仕事にのみかかりしは愚かなるだけ情に鈍くて、一条道より外へは駈けぬ老牛の痴に似たりけり。

金箔銀箔瑠璃真珠水精 以上合わせて五宝、丁子沈香白膠薫陸白檀
 以上合わせて五香、そのほか五葉五穀まで備えて大土祖神埴山彦神埴山媛
 神あらゆる鎮護の神々を祭る地鎮の式もすみ、地曳き土取り故障なく、さて竜伏はそ
 の月の生氣の方より右旋りに次第据え行き五星を祭り、斬初めの大礼には鍛冶の道
 をば創められし天の目一箇の命、番匠の道關かれし手置帆負の命彦狭知の命より思兼

命みこと天児屋根あまつこやねの命みこと太玉とだまの命みこと、木の神かみという句々くくのち廻馳かみの神かみまで七神祭ななかみまつりて、その次の清き
 鉦やがんなの礼れいも首尾しゅびよく済すみ、とうほうたいとらだじごくてんおう東方提頭とうほうたいとらだじごくてんおう頼らん持国ちこく天王てんおう、さいほうびろしやこうもくてんおう西方尾嚙さいほうびろしやこうもくてんおう又また広目くわうもく天王てんおう、なんぽう南方なんぽう
 毘留勒びりやく又また増長ぞうちやうてん天てん、ほつぽうびしやもんたもんでんおう北方毘沙門多聞ほつぽうびしやもんたもんでんおう天王てんおう、四天よっぴんにかたどる四方しやうほうの柱ちゆう千年せんねん万年まんねん動うごぐな
 と祈いのり定さだむる柱ちゆう立式りきしき、てんせいしきせいたがん天星色星多願てんせいしきせいたがんの玉ぎよく女じよ三神さんじん、たんろうきよもん貪狼たんろうきよもん巨門きよもん等と北斗ほくたうの七星しちせうを
 祭まつりて願ねがう永久安護えうきあんご、順したがに柱ちゆうのかりくさび仮かりくさび轄さつを三ツさんずつ打うつてわきつかさ脇わきつかさ司しに打うち緊しめさする十兵衛しうべゑ
 衛ゑは、幾干いくその苦心くしんもここまで運うべば垢穢きたなきかお顔かおにも光ひかりの出でるほど喜よろこ悦びに氣きの勇ゆうみ立ち、動うごきなき下津盤根しもついわねの太柱たいちゆうと式しきにて唱となうる古歌こかさえも、何なんとはなしにつくづく嬉うれしく、身みを立たつる世よのためしぞとその下したの句くを吟ぎんずるにも莞爾にこにこしつゝ二ふたたびし、壇だんに向むかうて礼拝れいはい恭こうみ、
 拍手かしかでの音おと清きよく響ひびかし一切成就いっけつじゆうじの祓はらいを終はるここの光景さまには引ひきかえて、源太げんたが家いへの物淋ものさび
 しさ。

主人あるじは男おとこの心強こころく思おもひを外そとには現あらわさねど、お吉きちは何なんほどさばけたりとてさすが女をんなの胸むね
 小こさく、出入しゆりいるものに感応かんおう寺てらの塔たかの地曳ぢひきの今日けふ済すみたり柱立式ちゆうりきしき昨日けふ済すみしと聞きくたびご
 とに忌々いまいましく、嫉妬ほむらつの火炎衝ほむらつき上がりて、汝おのれ十兵衛しうべゑ恩知おんちらずめ、良人うぢの心こころの広ひろいのをよ
 いことにしてつけ上あがり、うまうま名なを揚げ身みを立たつるか、よし名なの揚あがり身みの立たたばさしず
 め礼れいにも来きべきはずを、知らぬ顔かほして鼻高はな々とその日ひその日ひを送おくりくさるか、あまりに性ひ

質^とのよ過ぎたる良人も良人なら面憎きのつそりめもまたのつそりめと、折にふれては八重縦横に癩^{かんしゃく}癩^{かんしゃく}の虫跳ね廻らし、自己が小鬢^{こびん}の後れ毛上げても、ええ焦^しれたいと罪のなき髪を掻^かきむしり、一文貫^{もん}いに乞食^{こじき}が来ても甲張り声に酷^{むご}く謝^{ことわ}絶りなどしけるが、ある日源太^{るす}が不在^{るす}のところへ心易き医者道^{どうえき}益^{おし}という饒舌坊主遊び^{おしやべり}に來たりて、四方^{よも}八方^{やま}の話の末、ある人に連れられてこのあいだ蓬萊屋^{ほうらい}へまいりましたが、お伝という女からききました一分始終、いやどうも此方^{こち}の棟梁^{とうりやう}は違つたもの、えらいもの、男児^{おとこ}はそうありたいと感服^{かんぷく}いたしました、とお世辞半分何の気なしに云い出でし詞^{ことば}を、手繰^{たぐ}つてその夜の仔細^{しさい}をきけば、知らずにいてさえ口惜しきに知つては重々憎き十兵衛、お吉いよいよ腹を立ちぬ。

其二十四

清吉^{そなた}汝^{ふが}は腑甲斐^{ふがい}ない、意地も察しもない男、なぜ私には打ち明けてこないだの夜の始末をば今まで話してくれなかった、私に聞かして気の毒と異^{おつ}に遠慮をしたものか、あまりといえは狭隘^{けち}な根性、よしや仔細を聴いたとてまさか私が狼狽^{うろた}えまわり動転するようなことはせぬに、女と輕^{かろ}しめて何事も知らせずにおき隠し立てしておく良人^{うちのひと}の子簡^{ひと}はともかくも、

汝たちまで私を聾に盲目にして済まして居るとはあまりな仕打ち、また親方の腹の中がみ
 すみす知れていながらに平氣の平左で酒に浮かれ、女郎買いの供するばかりが男の能でも
 あるまいに、長閑氣でこうして遊びに来るとは、清吉汝もおめでたいの、平生は不在でも
 飲ませるところだが今日は私は関えない、海苔一枚焼いてやるも厭ならくだらぬ世間咄
 しの相手するも虫が嫌う、飲みたくば勝手に台所へ行つて呑み口ひねりや、談話がしたく
 ば猫でも相手にするがよい、と何も知らぬ清吉、道益が帰りし跡へ偶然行き合わせてさん
 ざんにお吉が不機嫌を浴びせかけられ、わけもわからず驚きあきれて、へどもどなしつつ
 だんだんと様子を問えば、自己も知らずに今の今までいしことなれど、聞けばなるほどど
 うあつても堪忍のならぬのつそりの憎さ、生命と頼むわが親方に重々恩を被た身をもつて
 無遠慮過ぎた十兵衛めが処置振り、あくまで親切真実の親方の顔踏みつけたる憎さも憎し
 どうしてくりよう。

ムム親方と十兵衛とは相撲にならぬ身分の差い、のつそり相手に争つては夜光の璧を小
 礫に擲つけるようなものなれば、腹は十分立たれても分別強く堪えて堪えて、誰にも彼
 にも鬱憤を洩らさず知らさず居らるるなるべし、ええ親方は情ない、ほかの奴はともか
 く清吉だけには知らしてもよさそうなものを、親方と十兵衛では此方が損、我とのつそり

なら損はない、よし、十兵衛め、ただ置こうやと逸^{はや}りきつたる鼻先思案。姉御、知らぬ中は是非がない、堪^{かに}忍^にして下され、様子知つては憚^{はば}りながらも叱^{しか}られてはおりますまい、この清吉が女郎買いの供するばかりを能の野郎か野郎でないか見ていて下され、さようならば、と後^{しりこえ}声^{はげ}烈^{はげ}しく云い捨てて格子戸^{こうしど}がらり明けつ放し、草履^{ぞうり}もはかず後も見ず風より疾^{はや}く駆け去れば、お吉今さら氣遣^{きづか}わしくつついて追っかけ呼びとむる二声三声、四声めにははや影さえも見えずなつたり。

其二十五

材^きを鉦^{はつ}る斧^{よく}の音、板削^{かん}る鉋^なの音、孔^{あな}を鑿^ほるやら釘^{くぎ}打つやら丁々かちかち響^{せわ}き忙^{せわ}しく、木^こ片^{つぱ}は飛^{あり}んで疾風^{あきまにぎ}に木の葉^はの翻^{ひる}えるがごとく、鋸^{おが}屑^{くず}舞^まつて晴天に雪の降る感応寺境内普請^{ふしん}場の景^{あり}況^{まにぎ}賑^{にぎ}やかに、紺^{あざ}の腹掛^{はらかけ}頸^{くび}筋^{すじ}に喰^くい込むようなをかけて小^こ胯^{また}の切^きり上^あがった股^も引^ひいなせに、つつかけ草履^{しやが}の勇^{ゆう}み姿^{すがた}、さも怜^り悧^{こう}げに働^{はたら}くもあり、汚^{よご}れ手^て拭^{ぬぐ}肩^{かた}にして日^ひ当^{あた}りのよき場所に蹲^{しゃが}踞^み、悠々然^{のほ}と鑿^みを硯^とぐ衣服^{なり}の垢^{きた}穢^なき命^{めい}もあり、道具^{どう}搜^{そう}しにまごつく小童^{わっぱ}、しきりに木を挽^ひく日傭^{ひよう}取り、人さまぎまの骨折^こ折^しり氣遣^{きづ}い、汗^{あせ}かき息張^{いきは}るその中に、

総棟梁ののつそり十兵衛、皆の仕事を監督^{みまわ}りかたがた、墨壺墨^{すみ}さし矩尺^{かね}もつて胸三寸にある切組を実物にする指図^{いづ}命令^{めい}。こう截^きれあ穿^ほれ、ここをどうしてどうやってそこにこれだけ勾配^{こうばい}もたせよ、孕^{はら}みが何寸凹^{くぼ}みが何分と口でも知らせ墨縄^{すみなわ}でも云わせ、面倒なるは板^{いた}片^{きれ}に矩尺の仕様を書いても示し、鶺鴒^うの目鷹^{たか}の目油断なく必死となりてみずから励み、今しも一人の若校^{わかもの}に彫物の画を描きやらんと余念もなしにいいところへ、野猪^{いのしし}よりもなお疾^{ほこり}く塵土を蹴立てて飛び来し清吉。

忿怒^{ふんど}の面火玉のごとくし逆釣つたる目を一段視開^{みひら}き、畜生、のつそり、くたばれ、と大喝すれば十兵衛驚^{おど}き、振り向く途端にまつ向より岩も裂けよと打ち下すは、ぎらぎらするまで硲^{せき}ぎ澄ませし鉾^{ちような}を縦にその柄にすげたる大工に取つての刀なれば、何かは堪^{たま}らん避くる間足らず左の耳を殺^そぎ落され肩先少し切り割^きかれしが、し損じたりとまた踏ん込んで打つを逃げつつ、抛^なげつくる釘箱才^{さいづち}槌墨壺^{かねざし}矩尺、利器^{えいもの}のなさに防^{すべ}ぐ術なく、身を翻えして退^{はすみ}く機に足を突つ込む道具箱、ぐざと踏み貫^ぬく五寸釘、思わず転ぶを得たりやと笠^{かさ}にかかつて清吉が振り冠^{かぶ}つたる鉾の刃先に夕日の光の閃^{きら}りと宿つて空に知られぬ電光^{いなすま}の、疾^としや遅しやその時この時、背面^{うしろ}の方に乳虎一声、馬鹿め、と叫ぶ男あつて二間丸太に論もななく両^{もうづねもう}脇脆^なく薙^なぎ倒せば、倒れてますます怒る清吉、たちまち勃^{むつく}然と起きんとする襟元^{えりもと}

把とつて、やい我われだわ、血迷うなこの馬鹿め、と何の苦もなく斬もぎ取り捨てながら上からぬつと出す顔は、八方睨にらみの大眼おおまなこ、一文字口怒り鼻、渦卷うずまき縮れの両鬢りょうびんは不動を欺あざむくばかりの相形そうぎよう。

やあ火の玉の親分か、わけがある、打捨うつちやつておいてくれ、と力を限り払い除のけんと蹴もぎ焦燥あせるを、栄螺さざえのごとき拳固げんこで鎮圧しずめ、ええ、じたばたすれば拳はり殺すぞ、馬鹿め。親分、情ない、ここをここを放してくれ。馬鹿め。ええ分らねえ、親分、あいつを活いかしてはおかれねえのだ。馬鹿野郎め、ベそをかくのか、おとなしくしなければまだ打ぶつぞ。親分酷ひどい。馬鹿め、やかましいわ、拳り殺すぞ。あんまり分らねえ、親分。馬鹿め、それ打つぞ。親分。馬鹿め。放して。馬鹿め。放して。馬鹿め。親。馬鹿め。放。馬鹿め。お。馬鹿め馬鹿め馬鹿め馬鹿め、醜態さまを見ろ、おとなしくなつたろう、野郎我が家へ来い、やいどうした、野郎、やあこいつは死んだな、つまらなく弱い奴だな、やあい、どいつか来い、肝心の時は逃げ出して今ごろ十兵衛が周圍まわりに蟻ありのように群たかつて何の役に立つ、馬鹿ども、こつちには亡者もうじやがでかかつて居るのだ、鈍遅どじめ、水でも汲んで来て打かつ注かけてやれい、落ちた耳を拾ておつて居る奴があるものか、白痴たわけめ、汲んで来たか、関かまうこととはない、一時に手桶ておけの水みんな面へ打つけろ、こんな野郎は脆く生きるものだ、それ占

めた、清吉ツ、しっかりしろ、意地のねえ、どれどれこいつは我が背負って行つてやろう、十兵衛が肩の疵きずは浅あかろうな、むむ、よしよし、馬鹿どもさようなら。

其二十六

源太居るかとはいり来たる鋭次を、お吉立ち上つて、おお親分さま、まあまあ此方こちへと誘いざなえば、ずっと通つて火鉢の前に無遠慮の大胡坐おおあぐらかき、汲んで出さるる桜湯を半分ばかり飲み干してお吉の顔を視、面色いろが悪いがどうかしたか、源太はどこぞへ行つたのか、定めしもう聴いたであろうが清吉めがつまらぬことをしでかしての、それゆえちよつと話があつて来たが、むむそうか、もう十兵衛がところへ行つたと、ハハハ、敏捷すばやい敏捷い、さすがに源太だわ、我われの思案より先に身体がとくに動いて居るなぞは頼もしい、なあにお吉心配することはない、十兵衛と御上人様に源太が謝罪わびをしてな、自分の示しが足らなかつたで手下ての奴がとんだ心得違いをしました。幾重いくえにも勘弁して下されと三ツ四ツ頭を下れば済んでしまうことだわ、案じ過しはいらぬもの、それでも先方さきがぐずぐずいえば正ま面おもに源太が喧嘩を買つて破裂ばれの始末をつければよいさ、薄々聴いた噂では十兵衛も耳みみたぶ朶

の一ツや半分^き斫^とり奪^とられても恨まれぬはず、随分清吉の輕^{おつちよ}躁^{こちよ}行為^いもちよいとおかしな
いい洒落^{しや}か知れぬ、ハハハ、しかし憫^{かわい}然^そに我の拳固^こを大分^{くち}食^くつてうんうん苦しがつて居る
ばかりか、十兵衛を殺した後はどう始末^{はつまつ}が着くと我に云われてようやく悟^{さと}ったかして、あ
あ悪^{わる}かつた、逸^はり過^やぎた間違^{まちが}ったことをした、親方に頭を下^{くだ}げさるようなことをしたか
ああ済^すまない、自分の身体^{みうち}の痛^{いた}いのより後悔^{くわい}にぼろぼろ涙^{なみだ}をこぼしている慙^{ふびん}然^んさは、な
んと可愛^{かわい}い奴^{やつ}ではないか、のうお吉、源太は酷^{むご}く清吉を叱^{しか}つて叱^{しか}つて十兵衛がとこへ謝^{あやま}
罪^りに行^いけとまで云うか知らぬが、それは表向^{おもむ}きの義理^{ぎり}なりや是非^しはないが、ここは汝^{おまえ}の
儲^もけ役^{やく}、あいつをどうか、なあそれ、よしか、そこは源太を抱^かき寝^ねするほどのお吉様にわ
からぬことはない寸法^{すんぽう}か、アハハハハ、源太がいなくて話^わも要^いらぬ、どれ帰^かろうかい御馳^{ごち}
走^はは預^よけておこう、用^{もち}があつたらいつでもおいで、とぼつぼつ語^{かた}つて歸^かりし後、思^{おも}えば済^す
まぬことばかり。女の浅^あき心^{こころ}から分別^{ぶんべつ}もなく清吉に毒^{どく}づきしが、逸^はりきつたる若^{わか}き男^{おとこ}の間
違^{ちが}いし出^でして可^あ憫^{われ}や清吉は自己^{おのれ}の世^よを狭^せめ、わが身^みは大切^{だいじ}の所^{ところ}天^{あま}をまで憎^{にく}うてならぬのつ
そりに謝^{あや}罪^まらするよう^{よう}なり行^いきしは、時の拍子^{はくし}の出来事^きながらつまりはわが口^{くち}より出^でし過^あ
失^{やまち}、兎^うせん角^{かく}せん何^{なに}とすべきと、火鉢^{ふち}の縁^{もた}に凭^ひする肘^{ひじ}のついがつくりと滑^{すべ}るまで、我^{われ}を
忘^{わす}れて思案^{しあん}に思案^{しあん}凝^ねらせしが、思^{おも}い定^{さだ}めて、おおそうじやと、立^たつて筆^{たんす}笥^すの大^{おほ}抽^{ひき}匣^{だし}、明

けて麝香じゃこうの氣かとともに投げ出し取り出すたしなみの、帯はそもそも此家ここへ来し嬉し恥かし恐ろしのその時締めし、ええそれよ。ねだつて買つてもろうたる博多はくたに繻子しゆすに未練もなし、三枚重ねに忍ばるる往時むかしは罪のない夢なり、今は苦勞の山繭やままゆじま縞、ひらりと飛ばす飛とびはちじよう八丈はちじようこのごろ好みし毛万筋、千筋百筋ちすじももすじ氣は乱るとも夫おもうはただ一筋、ただ一筋の唐七糸帯からしゆつちんは、お屋敷奉公せし叔母かたみが紀念だいじと大切に秘藏ひめたれど何か厭いとわん手放すを、と何やらかやらありたけ出して婢おんなに包ませ、夫の帰らぬそのうちと櫛くしこうがい筭いも手ばしこく小箱まに纏まとめて、さてそれを無残や余所よその蔵くらに籠こもらせ、幾らかの金懷ふとこ中に浅黄の頭巾小提こぢよう灯ちん、闇夜やみよも恐れず鋭次が家に。

其二十七

池の端の行き違いより翻然からりと変りし源太が腹の底、初めは可愛かわゆう思いしも今は小癩こしやくに障さわつてならぬその十兵衛に、頭かしらを下げ両手をついて謝罪あやまらねばならぬ忌々いまいましさ。さりとて打ち捨ておかば清吉の乱暴も我が命令いらいつけてさせしかのよう疑がわれて、何も知らぬ身心地快よからぬ濡衣被ぬれぎぬせられんことの口惜しく、たださえおもしろからぬこのごろよい

な魔がさして下らぬ心こころづか 勞らういを、馬鹿馬鹿しき清吉めが拳動ふるまいのためにせねばならぬ苦々しさにますます心平おだやか 穩おだやかならねど、処弁さばく道の処弁さばかで済むべきわけもなければ、これも皆自然に湧きしこと、なんとも是非なしと諦めて厭々ながら十兵衛が家音問おとずれ、不慮の難をば訪い慰め、かつは清吉を戒むること足らざりしを謝わび、のっそり夫婦が様子みを視るに十兵衛は例の無言三昧、お浪は女の物やさしく、幸い傷も肩のは浅く大したことではござりませねばどうぞお案じ下されますな、わざわざお見舞い下されては実に恐れ入ります、と如才なく口はきけど言葉遣いのあらたまりて、自然おのずとどこかに稜角かどあるは問わずと知れし胸うちの中、もしや源太が清吉に内々含めてさせしかと疑い居るに極まつたり。

ええ業腹ごうはらな、十兵衛も大方我をそう視て居るべし、とく時機ときの来よこの源太が返報しかえし仕様を見せてくれん、清吉ごとき卑劣けちな野郎のしたことに何似るべきか、斬ちで片耳殺そぎ取るごときくだらぬことを我がしうや、わが腹立ちは木片こつぱの火のぱつと燃え立ちすぐ消ゆる、堪こらえも意地もなきようなることでは済まさじ承知せじ、今日の変事は今日の変事、わが癩癩はわが癩癩、まるで別なり 関か係かりあなし、源太がしうは知るとき知れ悟らす時悟らせくれんと、裏うちにいよいよ不平は懷いだけど露塵つゆちりほども外には出さず、義理の挨拶あいさつ見事に済ましてすぐその足を感じ寺に向け、上人のお目通り願ひ、一応自己おのれが隸属みうちの者の不埒ふらちを

お謝罪^{わび}し、わが家に帰りて、いぎこれよりは鋭次に会い、その時清を押えくれたる礼をも演^のべつその時の景状^{ようす}をも聞きつ、また一ツにはさんざん清^{ののし}を罵り叱^{このち}つて以後わが家に入り無用と云いつけくれんと立ち出でかけ、お吉のいぬを不審^{おんな}してどこへと問え^{くちど}ば、どちらへかちよと行て来るとてお出でになりました、と何食わぬ顔で婢^{おんな}の答え、口禁^{くちど}めされたりとは知らねば、おおそうか、よしよし、我^{われ}は火の玉の兄きがところへ遊びに行たとお吉帰らば云うておけ、と草履^{ぞうり}つつかけ出合いがしら、胡麻竹^{ごまだけ}の杖^{つえ}とぼとぼと焼痕^{やけど}のある提灯^{ちようちん}片手、老いの歩みの見る目笑止にへの字なりして此方^{こち}へ来る婆^{ばば}。おお清の母親^{おふくろ}ではないか。あ、親方様でしたか、

其二十八

ああ好いところでお眼にかかりましたがどちらへかお出かけでござりまするか、と忙^{せわ}しげに老婆^{ばば}が問うに源太^{かろ}軽く会釈して、まあよいわ、遠慮せずと此方^{こち}へはいりやれ、わざわざ夜道を拾うて来たは何ぞ急の用か、聴いてあげよう、と立ち戻れば、ハイハイ、ありがとうござります、お出かけのところを済みません、御免下さいまし、ハイハイ、と云いな

がら後に随ついて格子戸くぐり、寒かつたろうによう出て来たの、あいにくお吉もないで
関かまうこともできぬが、縮こまっていずとずっと前へ進でて火にでもあたるがよい、と親切に
云うてくるる源太が言葉にいいよ身を堅くして縮こまり、お構い下さいましては恐れ入
りまする、ハイハイ、懷炉を入れておりますればこれで恰かつこう好でござりまする、と意久地
なく落ちかかる水みず涕すばなを洲の立つた半天の袖で拭ふきながらはるか下つて入口近きところに
蹲うずくまり、何やら云い出したような素振り、源太早くも大方察としして老婆の心の中さぞかしと
氣の毒さ堪たまらず、よけいなことし出いだして我に肝煎きもんらせし清吉のお先走りを罵ののり懲しらして、
当分出入りならぬ由云いに鋭次がところへ行かんとせし矢先であれど、視ればわが子を除
いては阿弥陀様あみだよりほかに親しい者もなかるべきか弱き婆のあわれにて、我われ清吉を突き放
さば身は腰弱弓の弦つるに断きれられし心地して、在るに甲斐なき生命いのちながらえんに張りもなく
的もなくなり、どれほどか悲しみ歎いて多くもあらぬ余生を愚痴なんだの涙しぐれの時雨に暮らし、晴
れ晴れとした氣持のする日もなくて終ることならんと、思いやれば思いやるだけ惘然ふびんさの
増し、煙草ひね捻ひねつてつい居るに、婆ばばは少しくにじり出で、夜分まいりましてまことに済みま
せんが、あの少しお願い申したいわけのござりまして、ハイハイ、もう御存知でもござり
ましようがああ清吉めがとんだことをいたしましたそうで、ハイハイ、鉄五郎様から大概

は聞きました、平常ふだんからして気の逸はい奴やつで、じきに打ぶつの斫きるのと騒さわぎましてそのたびにひやひやさせます、お蔭かげさまで一人前にはなっておりましてもまだ児童がきのような真ま一こく酷こく、悪いことや曲まつたことは決してしませぬが取り上のぼせては分別のなくなる困やっつた奴こで、ハイハイ、悪気は夢さらない奴やつでござります、ハイハイそれは御存知で、ハイありがとうござります、こういう筋で喧嘩をいたしましたか知りませぬが大それた手ちよう斧ななんぞを振り舞まわしましたそうで、そうきました時は私が手斧で斫きられたような心持がいたしました、め組の親分とやらが幸い抱き留めて下くだされましたとか、まあせめてもでござります、相手が死にでもしたら彼あれめは下手人、わたくしは彼を亡くして生きて居る瀬はござりませぬ、ハイありがとうござります、彼かれめが幼ちい少さいときはひどい虫持ごりで苦勞をさせられましたが、癒なおりましたら七歳ななつまでにお庭の土を踏ませましようと申しておきながら、ついににかにかまけてお礼参りもいたさせなかつたその御罰か、丈夫にはなりましたがあの通りの無鉄砲、毎々お世話をかけます、今日も今日とて鉄五郎様がこれこれと搔かい摘つまんで話されました時の私のびっくり、刃物を準備よういまでしてと聞いた時には、ええまたかと思わずどつきり胸も裂けそうになりました、め組の親分様とかが預かつて下くだされたのであれば安心

のようなものの、清めは怪我はいたしませぬかと聞けば鉄様の曖昧な返辞、別条はない案じるなど云わるるだけになお案ぜられ、その親分の家を尋ねれば、そこへ汝が行ったがよいか行かぬがよいか我には分らぬ、ともかくも親方様のところへ伺つて見ろと云いつ放しで帰つてしまわれ、なおなお胸がしくしく痛んでいても起つても居られませぬば、留守を隣家の傘張りに頼んでようやく参りました、どうかめ組の親分とやらの家を教えて下さいまし、ハイハイすぐにまいりますつもりで、どんな態しておりまするか、もしやかえつて大怪我などして居るのではござりますまいか、よいものならば早う逢つて安堵しとうござりまするし喧嘩の模様も聞きとうござりまする、大丈夫曲つたことはよもやいたすまいと思つておりまするが若い者のこと、ひよつと筋の違つた意趣ででもしたわけなら、相手の十兵衛様にまずこの婆が一生懸命で謝罪り、婆はたといどうされても惜しくない老耄、生先の長い彼めが人様に恨まれるようなことのないようにせねばなりません、とおろおろ涙になつての話し。始終を知らで一筋にわが子をおもう老いの繰言、この返答には源太こまりぬ。

其二十九

八五郎そこに居るか、誰か来たようだ明けてやれ、と云われて、なんだ不思議な、女らしいぞと口の中で独語うちつぶやきながら、誰だ女嫌いの親分のところへ今ごろ来るのは、さあはいりな、とがらりと戸を引き退のくれば、八ッさんお世話、と軽い挨拶、提灯吹き滅けして頭巾を脱ぎにかかるは、この盆にもこの正月にも心付けしてくれたお吉と気がついて八五郎めんくらい、素肌一枚どてらの裱まえ広がつて鼠色ねずみになりしふんどしの見ゆるを急に押し隠しなどしつ、親分、なんの、あの、なんの姉御だ、と忙せわしく奥へ声をかくるに、なんの尽しで分る江戸ッ児。おおそうか、お吉来たの、よく来た、まあそこらの塵埃ごみのなさそうなところへ坐つてくれ、油虫が這はつて行くから用心しな、野郎ばかりの家は不潔きたないのが粧飾みえだから仕方がない、我も汝われおまえのような好い鼻かかでも持ったら清潔きれいにしようよ、アハハハと笑えばお吉も笑いながら、そうしたらまた不潔不潔と厳しくお叱いじめなさるか知れぬ、と互いに二ツ三ツ冗話むだばなして後、お吉少しく改まり、清吉は眠ねておりますか、どういう様子か見てもやりたし、心にかかれば参りました、と云えば鋭次も打ち領うなずき、清は今がたすやすや睡ねについて起きそうにもない容態じやが、疵きずというて別にあるでもなし頭の顱骨さくらを打ち破わったわけでもなければ、整骨ほねつぎ医師いしやの先刻さつき云うには、ひどく逆上したところを滅茶滅茶に撲うた

れたため一時は氣絶までもしたれ、保証^{うけあい}大したことはない由、見たくばちよつと覗^{のぞ}いて見よ、と先に立つて導く後につき行くお吉、三疊ばかりの部屋の中に一切夢で眠り居る清吉を見るに、顔も頭も膨^はれ上りて、このように撲^うつてなしたる鋭次^{むか}の酷^{むご}さが恨めしきまで可憫^{あわれ}なる態^{さま}なれど、済んだことの是非もなく、座に戻^もつて鋭次^{むか}に對^{むか}い、我夫^{うち}では必ず清吉がよけいな手出しに腹を立ち、お上人様やら十兵衛への義理をかねて酷く叱るか出入りを禁^とむるか何とかするでござりましょうが、元はといえば清吉が自分の意恨でしたではなし、つまりは此方^{こち}のことのため、筋の違つた腹立ちをついむらむらとしたのみなれば、妾^{わたし}はどうも我夫のするばかりを見て居るわけには行かず、ことさら少しわけあつて妾がどうかしてやらねばこの胸の済まぬ仕誼^{しぎ}もあり、それやこれやをいろいろと案じた末に浮んだは一年か半年ほど清吉に此地^{こち}退かすること、人の噂も遠のいて我夫の機嫌^{なほ}も治^{なほ}つたら取り成しようは幾らもあり、まずそれまでは上方あたりに遊んで居るようしてやりたく、路用の金も調^{こしら}えて来ましたれば少しなれどもお預け申しまする、どうぞよろしく云い含めて清吉めに与^やつて下さりませ、我夫はあの通り表裏のない人、腹の底にはどう思つても必ず辛く清吉に一旦あたるに違いなく、未練げなしに叱りましょうが、その時何と清吉がたとい云うても取り上げぬは知れたこと、傍から妾が口を出しても義理は義理なりやしうはなし、

さりとて欲でしかした咎とがでもないに男一人の寄りつく島もないようにして知らぬ顔では
 どうしても妾が居られませぬ、彼あれが一人の母のことは彼さえいねば我夫にも話して扶助たすく
 に厭は云わせまじく、また厭あへというような分らぬことを云いもしますまいなれば掛念けねんはな
 けれど、妾が今夜来たことやら蔭かげで清をばいたわることは、我夫へは当分秘密ないしよにして。
 わかった、えらい、もう用はなからう、お帰りお帰り、源太が大抵来るかも知れぬ、撞でつく
 見みしては拙ますかろう、と愛想はなけれど眞実はある言葉に、お吉嬉うれしく頼みおきて帰れば、
 その後へ引きちがえて来る源太、はたして清吉に、出入りを禁とむる師弟の縁断きるとの言い
 渡し。鋭次は笑つて黙り、清吉は泣いて詫びしが、その夜源太の帰りしあと、清吉鋭次に
 また泣かせられて、狗いぬになつても我や姉御夫婦の門辺は去らぬと唸うなりける。
 四五日過ぎて清吉は八五郎に送られ、箱根の温泉いでゆを志して江戸を出でしが、それよりた
 だる東海道いたるは京か大阪の、夢はいつでも東都あすまなるべし。

其三十

十兵衛傷を負うて帰つたる翌朝、平生いづものごとく夙とく起き出づればお浪驚いて急にとどめ、

まあ滅相な、ゆるりと臥^{やす}んでおいでなされおいでなされ、今日は取りわけ朝風の冷たいに破傷風にでもなったら何となさる、どうか臥^{やす}んでいて下され、お湯ももうじき沸きましよ
うほどに含嗽^{うがい}手水もそこで妾がさせてあげましよ、と破れ土竈^{べつづい}にかけたる羽虧^{はか}け釜^{がま}
の下焚^たきつけながら氣を揉^もんで云えど、一向平氣の十兵衛笑つて、病人あしらいにされる
までのことはない、手拭だけを絞つてもらえば顔も一人で洗うたが好い氣持じや、と籠^{たが}の
緩^{ゆる}みし小盥^{こだらひ}にみずから水を汲み取りて、別段悩める容態^{ようす}もなく平日^{ふだん}のごとく振舞えば、
お浪^{あき}は呆^{あき}れかつ案ずるに、のっそり少しも頓^{とん}着^{じやく}せず朝食^{あさめし}終^{しま}うて立ち上り、いきなり
衣物を脱ぎ捨てて股^{もも}引腹掛^{ひき}け着^きけにかかるを、とんでもないことどこへ行かるる、何ほ
ど仕事の大事じやとて昨日の今日は疵口^{きずぐち}の合いもすまいし痛みも去るまじ、じつとしてい
よ身体を使うな、仔細^{しそ}はなけれど治癒^{なほ}るまでは万般^{よろず}要^つ慎^し第一と云われたお医者様の言葉
さえあるに、無理^お圧^おしして感応寺^{かんとじ}に行かるる心か、強過ぎる、たとい行つたとて働きはな
るまじ、行かいでも誰^たが咎^{とが}みよう、行かで済まぬと思わるるなら妾^おがちよと一走り、お上
人様のお目にかかつて三日四日の養生^{じやうじき}を直^{ただ}々に願^{ねが}うて来ましよ、お慈悲深いお上人様の
御承知^{ごしやうち}なされぬ氣遣^{きぢ}いない、かならず大切^{だいじ}にせい輕^{かる}拳^{こぶし}すなどおつしやるは知れたこと、
さあ此衣^{これ}を着^きて家に引つ籠^こみ、せめて疵口^{きずぐち}のすっかり密着^{くっ}くまで沈靜^{おちつ}いていて下され、と

ひとすらとどめ宥め慰め、脱ぎしをとってまた被すれば、よけいな世話を焼かずとよし、
 腹掛け着せい、これは要らぬ、と利く右の手にて撥ね退くる。まあそう云わずと家にて、
 とまた打ち被する、撥ね退くる、男は意気地女は情、言葉あらそい果てしなればさすが
 にのつそり少し怒って、わけの分らぬ女の分で邪魔立てするか忌々しい奴、よしよし頼
 まぬ一人で着る、高の知れたる蚯蚓膨れに一日なりとも仕事を休んで職人どもの上に立て
 るか、汝はちつとも知るまいがの、この十兵衛はおろかしくて馬鹿と常々云わるる身ゆえ
 に職人どもが軽う見て、眼の前ではわが指揮に従い働くようなれど、蔭では勝手に怠惰る
 やら譏るやらさんざんに茶にしている、表面こそ粧え誰一人眞実仕事をよくしようという
 意気組持つてしてくるものはないわ、ええ情ない、どうかして虚飾でなしに骨を折って
 もらいたい、仕事に膏を乗せてもらいたいと、論せば頭は下げながら横向いて鼻で笑われ、
 叱れば口に謝罪られて顔色に怒られ、つくづく我折って下手に出ればすぐと増長さるる
 口惜しさ悲しさ辛さ、毎日毎日棟梁棟梁と大勢に立てられるは立派でよけれど腹の中では
 泣きたいようなことばかり、いつそ穴鑿りで引つ使われたほうが苦しいと思うくら
 い、その中でどうか此日まで運ばして来たに今日休んでは大事の躓き、胸が痛いか
 ら早帰りします、頭痛がするで遅くなりましたと皆に怠惰られるは必定、その時自分

が休んで居れば何と一言云いようなく、仕事あまだが雨垂れ拍子になつてできべきものも仕損しそこなう道理、万が一にも仕損じてはお上人様源太親方に十兵衛の顔が向けらりようか、これ、生きても塔ができねばな、この十兵衛は死んだ同然、死んでも業わざをし遂げれば汝おやじが夫は生きて居るわい、二寸三寸の手斧ちようなきず傷ねに臥て居られるか居られぬか、破傷風が怖おそろしいか仕事のできぬが怖ろしいか、よしや片腕と奪られたとて一切成就の暁までは駕籠かごに乗つても行かではないぬ、ましてやこれしきの蚯蚓みみずば膨れに、と云いつつお浪が手中より奪いとつたる腹掛けに、左の手を通さんとしてしか響むる顔、見るに女房の争えず、争いまして傷をいたわり、ついに半天股引まで着せて出しける心の中、何とも口には云いがたかるべし。

十兵衛よもや来はせじと思ひ合うたる職人ども、ちらりほらりと辰の刻ころより来て見てびつくりする途端、精出してくるる嬉しいぞ、との一言を十兵衛から受けて皆冷汗をかきけるが、これより一同みなみな励み勤め昨日に変わる身のこなし、一をきいては三まで働き、二と云われしには四まで動けば、のっそり片腕の用を欠いてかえつて多くの腕を得つ日々にちにち工事ごとはかど歩取り、肩疵治るころには大抵塔もできあがりぬ。

時は一月の末つ方、のつそり十兵衛が辛苦経営むなしからで、感応寺生雲塔いよいよも
 のの見事に出来上り、だんだん足場を取り除けば次第次第に露わるる一階一階また一階、
 五重巍然と聳えしさま、金剛力士が魔軍を睥睨んで十六丈の姿を現じ坤軸動がす足ぶみ
 して巖上に突つ立ちたるごとく、天晴れ立派に建つたるかな、あら快よき細工振りかな、
 希有じや未曾有じやまたあるまじと為右衛門より門番までも、初手のつそりを輕しめたる
 ことは忘れて讚歎すれば、円道はじめ一山の僧徒も躍りあがって歡喜び、これでこそ感
 応寺の五重塔なれ、あら嬉しや、我らが頼む師は当世に肩を比すべき人もなく、八宗九宗
 の碩徳たち虎豹鶴鷺と勝ぐれたまえる中にも絶類拔群にて、譬えば獅子王孔雀王、
 我らが頼むこの寺の塔も絶類拔群にて、奈良や京都はいざ知らず上野浅草芝山内、江戸に
 て此塔に勝るものなし、ことさら塵土に埋もれて光も放たず終るべかりし男を拾いあげら
 れて、心の宝珠の輝きを世に発出されし師の美德、困苦に撓まず知己に酬いてついにし遂
 げし十兵衛が頼もしさ、おもしろくまた美わしき奇因縁なり妙因縁なり、天のなせしか人
 のなせしかはたまた諸天善神の蔭にて操りたまいしか、屋を造るに巧妙なりし達膩伽尊者
 の噂はあれど世尊在世の御時にもかく快きことありしをいまだきかねば漢土にもきかず、

いで落成の式あらば我偈げを作らん文を作らん、我歌をよみ詩を作なして頌しょうせん讃さんせん詠ぎぜん
記せんと、おのおの互いに語り合ひしは欲のみならぬ人間ひとの情の、やさしくもまた殊勝な
るに引き替えて、測りがたきは天の心、円道為右衛門二人が計らいとしていと盛んなる落
成式しゅうぎよう執行の日もほぼ定まり、その日は貴賤男女の見物をゆるし貧者に剩あまれる金を施し、
十兵衛その他を犒ねぎらい賞する一方には、また伎楽ぎかくを奏して世に珍しき塔供養あるべきはず
に支度とりどりなりし最中、夜半の鐘の音の曇つつて平日つねには似つかず耳にきたなく聞えし
がそもそも、漸々ぜんぜんあやしき風吹き出して、眠れる児童こどもも我知らず夜具踏み脱ぐほど時候
生暖かくなるにつれ、雨戸のがたつく響はびき烈はげしくなりまさり、闇に揉もまるる松柏こずえの梢えに天
魔の号さけびものすごくも、人の心の平和を奪え平和を奪え、浮世の榮華に誇れる奴らの胆きもを
破やぶれや睡ねむりを攪みだせや、愚物の胸に血の濤打なみたせよ、偽物の面の紅き色奪とれ、斧持おのてる者斧
を揮ふるえ、矛ほこもてるもの矛を揮え、汝なんじらが鋭とき剣は餓うえたり汝ら剣に食をあたえよ、人の膏あ
血ぶらはよき食なり汝ら剣にあくまで喰わせよ、あくまで人の膏膩あぶらを餌かえと、号令きびしく発
するや否、猛風一陣どつと起つて、斧をもつ夜叉やしや矛もてる夜叉餓えたる剣もてる夜叉、皆
一斉あに暴あれ出しぬ。

其三十二

長夜の夢を覚まされて江戸四里四方の老若男女、悪風来たりと驚き騒ぎ、雨戸の横柄子
 しつかと挿せ、辛張り棒を強く張れと家々ごとに狼狽ゆるを、可愍とも見ぬ飛天夜叉王、
 怒号の声音ただけしく、汝ら人を憚るな、汝ら人間に憚られよ、人間は我らを軽んじ
 り、久しく我らを賤しめたり、我らに捧ぐべきはずの定めを忘れたり、這う代りとし
 て立つて行く狗、驕奢の埒巢作れる禽、尻尾なき猿、物言う蛇、露誠実なき狐の子、汚穢
 を知らざる豕の女、彼らに長く侮られてついにいつまで忍び得ん、我らを長く侮らせて彼
 らをいつまで誇らすべき、忍ぶべきだけ忍びたり誇らすべきだけ誇らしたり、六十四年は
 すでに過ぎたり、我らを縛せし機運の鉄鎖、我らを囚えし慈忍の岩窟はわが神力にてちぎ
 り棄てたり崩潰したり、汝ら暴れよ今こそ暴れよ、何十年の恨みの毒氣を彼らに返せ一
 時に返せ、彼らが驕慢の氣の臭さを鉄圀山外に攫んで捨てよ、彼らの頭を地につかしめよ、
 無慈悲の斧の刃味のよさを彼らが胸に試みよ、慘酷の矛、瞋恚の劍の刃糞と彼らをなし
 くれよ、彼らが喉に氷を与えて苦寒に怖れ顫かしめよ、彼らが胆に針を与えて秘密の痛み
 に堪えざらしめよ、彼らが眼前に彼らが生したる多数の奢侈の子孫を殺して、玩物の念

を嗟歎さたんの灰の河に埋めよ、彼らは蚕兒かいこの家を奪いぬ汝ら彼らの家を奪えや、彼らは蚕兒の知恵を笑いぬ汝ら彼らの知恵を讃せよ、すべて彼らの巧みとおもえる知恵を讃せよ、大とおもえる意こころを讃せよ、美わしとみずからおもえる情を讃せよ、協かなえりとなす理を讃せよ、剛つよしとなせる力を讃せよ、すべては我らの矛の餌えなれば、劍の餌なれば斧の餌なれば、讃して後に利器えものに餌かい、よき餌をつくりし彼らを笑え、鰯なぶらるるだけ彼らを鰯れ、急に屠ほふるな鰯り殺せ、活いかしながらに一枚一枚皮を剥はぎ取れ、肉を剥ぎとれ、彼らが心臓しんを鞠まりとして蹴けよ、枳からたち棘きをもて背を鞭うてよ、歎息の呼吸いき涙の水、動悸どうきの血の音悲鳴の声、それらをすべて人間より取れ、残忍のほか快樂けらくなし、酷烈こくならずば汝ら疾とく死ね、暴れよ進めよ、無法に住して放逸むざん無慚無理無体に暴れ立て暴れ立て進め進め、神とも戦え仏をも擲たけ、道理を壊やぶつて壊りすてなば天下は我らがものなるぞと、叱咤しったするたび土石を飛ばして丑うしの刻より寅とらの刻、卯うとなり辰たつとなるまでもちつとも止まず励ましたつれば、数万すまんの眷属けんぞく勇みをなし、水を渡るは波を蹴かえし、陸おかを走るは沙すなを蹴かえし、天地を塵埃ほこりに黄ばまして日の光をもほとほと掩おほい、斧を揮つて数寄者が手入れ怠りなき松を冷あざわ笑いつつほつきと斫きるあり、矛を舞わして板屋根にたちまち穴うがを穿つもあり、ゆさゆさゆさと怪力もてさも堅固なる家を動かし橋を揺がすものもあり。手ぬるし手ぬるし酷むごさが足らぬ、我に続けと憤ふ

怒^ぬの牙^{くは}嚙^かみ鳴^ならしつつ夜叉王^{おど}の躍^{おど}り上^あつて焦躁^{いらだ}てば、虚空^{こくう}に充^みち満^みちたる眷属^{けんじく}、おたけび鋭^{えい}くおめき叫^こんで遮^{しや}に無^なに暴威^{ばうい}を揮^ひうほどに、神前寺内^{しんぜんじうち}に立^たてる樹^きも富家^{ふうか}の庭^{にわ}に養^かわれし樹^きも、声^{こゑ}振^ふり絞^{しぼ}つて泣^なき悲^{かな}しみ、見^みる見^みる大地^{だいち}の髪^{かみ}の毛^けは恐怖^{こふふ}に一々^{じゅうりつ}豎^{たて}立^{りつ}なし、柳^{やなぎ}は倒^{たふ}れ竹^{たけ}は割^わるる折^かしも、黒雲^{くろぐも}空^{そら}に流^{なが}れて櫓^{かき}の実^みよりも大^{おほ}きなる雨^{あめ}ばらりばらりと降^ふり出^でせば、得^えたりとますます暴^はるる夜叉^や、垣^{かき}を引き捨^すて堀^{へい}を蹴^け倒^{たふ}し、門^{かど}をも破^{こわ}し屋根^{やね}をもめくり軒端^{のきば}の瓦^{かわら}を踏^ふみ砕^{くだ}き、ただ一揉^{くすり}みに屑屋^{くすや}を飛^とばし二揉^{くすり}み揉^もんでは二階^{にかい}を捻^ねじ取^とり、三たび揉^もんでは某^{なにがし}寺^{でら}をももの見事^{みごと}に潰^{つぶ}し崩^{くず}し、どうどうどつと鬨^{とき}をあぐるそのたびごとに心^{こゝろ}を冷^{ひや}やし胸^{むね}を騒^{さわ}がす人々^{ひと}の、あれに氣^きづかいこれに案^{あん}ずる笑^{わら}止^どの様^{よう}を見ては喜^{よろこ}び、居所^{いしょ}さえもなくされて悲^{かな}しむものを見ては喜^{よろこ}び、いよいよ凶^{よく}に乘^のり狼藉^{ろうぜき}のあらん限^{かぎ}りを逞^{たくま}しゆうすれば、八百八町百万^{はちひゃくはちぢゅうばん}の人^{ひと}みな生^なける心地^{こころ}せず顔色^{がんしき}さらにあらばこそ。

中^{なかつ}にもわけて驚^{おどろ}きしは円道^{えんどう}為^な右衛門^{えもん}、せつかくわずかに出来上^{できあ}りし五重塔^{ごじゅうたか}は揉^もまれ揉^もまれて九輪^{くりん}は動^{うご}き、頂上^{ていじやう}の宝珠^{ほうしゆ}は空^{そら}に得^え読^よめぬ字^じを書^かき、岩^{いわ}をも転^{ころ}ばすべき風^{ふう}の突^つかけ来^きたり、楯^{たて}をも貫^くくべき雨^{あめ}のぶつかり来^きるたび撓^{たわ}む姿^{すがた}、木^きの軋^{きし}る音^{おと}、復^{もど}る姿^{すがた}、また撓^{たわ}む姿^{すがた}、軋^{きし}る音^{おと}、今^{いま}にも傾^{くつがえ}覆^{ふく}らんず様子^{ようす}に、あれあれ危^{あや}し仕様^{しやうが}はなきか、傾^{くつがえ}覆^{ふく}られては大事^{だいじ}なり、止^{とど}むる術^{すべ}もなきことか、雨^{あめ}さえ加^くわり来^きたりし上周围^{まわり}に樹木^{じゆもく}もあらざれば、未曾^{みぞう}有^ある風^{ふう}に

基礎狭くて丈のみ高きこの塔の堪えんことのおぼつかなし、本堂さえもこれほどに動けば塔はいかばかりぞ、風を止むる呪文はきかぬか、かく恐ろしき大暴風雨に見舞いに来べき源太は見えぬか、まだ新しき出入りなりとて重々来ではかなわざる十兵衛見えぬか寛怠なり、他さえかほど気づかうに己がせし塔氣にかけぬか、あれあれ危しまた撓んだわ、誰か十兵衛招びに行け、といえども天に瓦飛び板飛び、地上に砂利の舞う中を行かんというものなく、ようやく賞美の金に飽かして掃除人の七蔵爺を出しやりぬ。

其三十三

毫碌頭巾に首をつつみてその上に雨を凌がんと準備の竹の皮笠引き被り、鳶子合羽に胴締めして手ごろの杖持ち、恐怖ながら烈風強雨の中を駈け抜けたる七蔵爺、ようやく十兵衛が家にいたれば、これはまた酷いこと、屋根半分はもうとうに風に奪られて見るさえ気の毒な親子三人の有様、隅の方にかたまり合うて天井より落ち来る点滴の飛沫を古筵でわずかに避け居る始末に、さてもものつそりは氣に働らきのない男と呆れ果てつつ、これ棟梁殿、この暴風雨にそうして居られては済むまい、瓦が飛ぶ樹が折れる、戸外はまるで

戦争いくさのような騒さわぎの中に、汝おまえの建たてられたあの塔たはどうあろうと思おもわるる、丈だけは高たかし周圍まわりに物ものはなし基礎きぞうは狭せまし、どの方角ほうかくから吹ふく風かぜをも正面まともに受うけて揺ゆれるわ揺ゆれるわ、旗竿はたざおほどに撓しなんではきちきちと材きの軋きしる音おとの物もの凄すごさ、今いまにも倒たふれるか壊こわれるかと、円道えんどう様さまも為な右衛門えもん様さまも胆いを冷ひやしたり縮ちぢましたりして氣きが氣きではなく心こころ配はいして居ゐらるるに、一体いっならば迎むかいなど受うけずともこの天あま変へを知らず顔かほでは済おさまめ汝おまえが出ても来きぬとはあんまりな大勇だいゆう、汝おまえのお蔭かげで險難けんなんな使つかいをいいつかり、忌いまい々ましいこの瘤こぶを見みてくれ、笠かさは吹ふき攪さらわるるずぶ濡ぬれにはなる、おまけに木片きさが飛とんで来きて額かぶにぶつかりくさったぞ、いい面おもての皮かわとは我われがこと、さあさあ一い所ところに来きてくれ来きてくれ、為な右衛門えもん様さま円道えんどう様さまが連つれて来きいとの御お命令めいれいだわ、ええびつくりした、雨戸あめどが飛とんで行いてしもうたのか、これだもの塔たが堪たるものか、話わしする間かんにももう倒たふれたか折おれたか知しれぬ、ぐずぐずせずと身み支し度どせい、はやくはやくと急せり立たつれば、傍そばから女房にようばうも心こころ配はいげに、出でて行いかるるなら途みち中なかが危あぶ険ない、腐くさつてもあの火事頭かじづか中なか、あれを出でしましよ冠かぶつておいでなされ、何なにが飛とんで来きるか知しれたものではなし、外見みえよりは身みが大切だいじ、いくら檻樓ぼろでも仕方し方かたない刺子絆ばんてん纏まとも上に被きておいでなされ、と戸棚とどろがたがた明あけにかかるを、十兵衛じゅうべゑ不興ふきやうげの眼めでじつと見みながら、ああ構かまうてくれずともよい、出でては行いかぬわ、風かぜが吹ふいたとて騒さわぐには及およばぬ、七藏殿しちざう御苦勞ごくろうでござりまし

たが塔は大丈夫倒れませぬ、なんのこれほどの暴風雨で倒れたり折れたりするような脆いものではござりませねば、十兵衛が掛けてまいるにも及びませぬ、円道様にも為右衛門様にもそう云うて下され、大丈夫、大丈夫でござります、と泰然はらって身動きもせず答うれば、七蔵少し膨れ面して、まあともかくも我と一緒に来てくれ、来て見るがよい、あの塔のゆさゆさきちきちと動くさまを、ここにいて目に見ねばこそ威張って居らるれ、御開帳の幟のように頭を振って居るさまを見られたらなんぼ十兵衛殿寛濶な気性でも、お気の毒ながら魂魄がふわりふわりとならるであらう、蔭で強いのが役にはたたぬ、さあさあ一所に來たり來たり、それまた吹くわ、ああ恐ろしい、なかなか止みそうにもない風の景色、円道様も為右衛門様も定めし肝を煎っておらるるじやろ、さっさと頭巾なり絆纏なり冠るとも被るともして出かけさっしやれ、とやり返す。大丈夫でござります、御安心なさってお歸り、と突っぱねる。その安心がそう手易くはできぬわい、とうるさく云う。大丈夫でござります、と同じことをいう。末には七蔵焦れこんで、なんでもかでも来いというたら来い、私の言葉とおもうたら違うぞ円道様為右衛門様の御命令じゃ、と語気あらくなれば十兵衛も少し勃然として、我は円道様為右衛門様から五重塔建ていは命令かりませぬ、お上人様は定めし風が吹いたからとて十兵衛よべとおっしゃります

まい、そのような情ないことを云うては下さりますまい、もしもお上人様までが塔危あぶないぞ
 十兵衛呼べと云わるるようになれば、十兵衛一期の大事、死ぬか生きるかの瀬門せとに乗つか
 かる時、天命を覚悟して駈けつけましようなれど、お上人様が一言半句十兵衛の細工をお
 疑いなさらぬ以上は何心配のこともなし、余の人たちが何を云わりようと、紙を材きにして
 仕事もせず魔術てすまも手抜きもしていぬ十兵衛、天氣のよい日と同じことに雨の降る日も風の
 夜も樂々としておりまする、暴風雨が怖こわいものでもなければ地震が怖うもござりませぬと
 円道様にいうて下され、と愛想なく云い切るにぞ、七蔵仕方なく風雨の中を駈け抜けて感
 応寺に帰りつき円道為右衛門にこのよし云えば、さてもその場に臨んでの知恵のない奴め、
 なぜその時に上人様が十兵衛来いとの仰せじやとは云わぬ、あれあれあの揺るる態さまを見よ、
 汝きさままでがのつそりに同化かぶれて寛怠過ぎた了見じや、是非はない、も一度行つて上人様のお
 言葉じやと欺誑たばかり、文句いわせず連れて来い、と円道に烈しく叱られ、忌々いまいましさに独語つぶや
 きつつ七蔵ふたたび寺門を出でぬ。

其三十四

さあ十兵衛、今度は是非に來よ四の五のは云わせぬ、上人様のお召しじやぞ、と七藏爺いきりきつて門口から我鳴れば、十兵衛聞くより身を起して、なにあの、上人様のお召しなさるとか、七藏殿それは真実でござりまするか、ああなさけない、何ほど風の強ければとて頼みきつたる上人様までが、この十兵衛の一心かけて建てたものを脆くも破壊るるかのように思し召されたか口惜しい、世界に我を慈悲の眼で見て下さるただ一つの神とも仏ともおもっていた上人様にも、真底からはわが手腕たしかと思われざりしか、つくづく頼もしげなき世間、もう十兵衛の生き甲斐なし、たまたま当時に双びなき尊き智識に知られしを、これ一生の面目とおもうて空に悦びしも真にはかなきしばしの夢、嵐の風のそよと吹けば丹誠凝らせしあの塔も倒れやせんと疑わるとは、ええ腹の立つ、泣きたいような、それほど我は腑のない奴か、恥をも知らぬ奴と見ゆるか、自己がしたる仕事は恥辱を受けてものめのめ面押し拭うて自己は生きて居るような男と我は見らるるか、たとえばあの塔倒れた時生きていようか生きたかろうか、ええ口惜しい、腹の立つ、お浪、それほど我が鄙しかろうか、あゝあゝ生命ももういらぬ、わが身体にも愛想の尽きた、この世の中から見放された十兵衛は生きて居るだけ恥辱をかく苦悩を受ける、ええいつそのこと塔も倒れよ暴風雨もこの上烈しくなれ、少しなりともあの塔に損じのできてくれよかし、空吹

く風も地打つ雨も人間ほど我には情なからねば、塔破壊されても倒されても悦びこそせめ
 恨みはせじ、板一枚の吹きめくられ釘一本の抜かるとも、味気なき世に未練はもたねば
 ものの見事に死んで退けて、十兵衛という愚魯漢は自己が業の粗漏より恥辱を受けても、
 生命惜しさに生存えて居るような鄙劣な奴ではなかりしか、かかる心をもつていしか
 と責めては後にて弔われん、一度はどうせ捨つる身の捨て処よし捨て時よし、仏寺を汚す
 は恐れあれどわが建てしもの壊れしならばその場を一步立ち去り得べきや、諸仏菩薩もお
 許しあれ、生雲塔の頂上より直ちに飛んで身を捨てん、投ぐる五尺の皮囊は潰れて
 醜かるべきも、きたなきものを盛つてはおらず、あわれ男児の醇粹、清浄の血を
 流さんなれば愍然ともこそ照覧あれと、おもいしことやら思わざりしや十兵衛自身も半分
 知らで、夢路をいつの間にかたどりし、七蔵にさえどこでか分れて、ここは、おお、それ、
 その塔なり。

上りつめたる第五層の戸を押し明けて今しもぬつと十兵衛半身あらわせば、礫を投ぐる
 がごとき暴雨の眼も明けさせず面を打ち、一ツ残りし耳までもちぎらんばかりに猛風の呼
 吸さえさせず吹きかくるに、思わず一足退きしが屈せず奮って立ち出でつ、欄を握んでき
 つと睥めば天は五月の闇より黒く、ただ囂々たる風の音のみ宇宙に充ちて物騒がしく、

さしも堅固の塔なれど虚空に高く聳えたれば、どうどうと風の来るたびゆらめき動き
て、荒浪の上に揉まるる棚なし小舟のあわや傾覆らん風情、さすが覺悟を極めたりしも
また今さらにおもわれて、一期の大事死生の岐路と八万四千の身の毛よだたせ牙咬みしめ
て眼を睜り、いざその時はと手にして来し六分鑿の柄忘るるばかり引つ握んでぞ、天命
を静かに待つとも知るや知らずや、風雨いとわず塔の周囲を幾たびとなく徘徊する、怪
しの男一人ありけり。

其三十五

去る日の暴風雨は我ら生まれてから以来第一の騒ぎなりしと、常は何事に逢うても二
十年前三十年前にありし例をひき出して古きを大げさに、新しきをわけもなく云い消す気
質の老人さえ、真底我折つて噂し合えば、まして天変地異をおもしろずくで談話の種子
にするような剽軽な若い人は分別もなく、後腹の疾まぬを幸い、どこの火の見が壊れ
たりかしこの二階が吹き飛ばされたりと、他の憂い災難をわが茶受けとし、醜態を見よ馬
鹿欲から芝居の金主して何某め痛い目に逢うたるなるべし、さても笑止あ的小屋の潰れ

方はよ、また日ごろより小面憎かりし横町の生花の宗匠が二階、お神楽かぐらだけのことはあり
 しも氣味きびよし、それよりは江戸で一二といわるる大寺の脆く倒れたも仔細こそあれ、実は
 檀徒だんとから多分の寄附金集めながら役僧の私曲わたくし、受負師の手品、そこにはそのありし由、
 察するに本堂のあの太い柱も桶おけでがなあったろうななどとさまぎまの沙汰に及びけるが、
 いずれも感応寺生雲塔の釘一本ゆるまず板一枚剥はがれざりしには舌を巻きて讃歎し、いや
 彼塔あれを作った十兵衛というはなんとえらいものではござらぬか、あの塔倒れたら生きては
 いぬ覚悟であつたそうな、すでのことのに鑿のみ啣みくんで十六間真逆まさかしまに飛ぶところ、欄干てすりをこ
 う踏み、風雨を睨にらんであれほどの大揉めの中にじつと構えていたというが、その一念でも
 破壊こわるまい、風の神も大方血眼ちまなこで睨にらまれては遠慮が出たであろうか、甚五郎じんごろうこのかた
 の名人じや真の棟梁じや、浅草のも芝のもそれぞれ損じのあつたに一寸一分歪ゆがみもせず退ず
 りもせぬとはよう造つたことの。いやそれについて話しのある、その十兵衛という男の親
 分がまた滅法えらいもので、もしもちとなり破壊れでもしたら同職なにかまの恥辱はじ知合いの面汚うぬし、
 汝うぬはそれでも生きて居りようかと、とても再び鉄槌かなづちも手斧ちようなも握ることのできぬほど引
 つ叱しかつて、武士で云わば詰腹同様の目に逢わしようと、ぐるぐるぐる大雨を浴びながら塔
 の周囲まわりを巡つていたそうな。いやいや、それは間違ひ、親分ではない商売しょうばい上敵いたきじやそ

うな、と我れ知り顔に語り伝えぬ。

暴風雨のために準備したく狂いし落成式もいよいよ済みし日、上人わざわざ源太を召よびたまいて十兵衛とともに塔に上られ、心あつて難僧こぞうに持たせられしお筆に墨汁すみしたたか含ませ、我この塔に銘じて得させん、十兵衛も見よ源太も見よと宣のたまいつつ、江都の住人十兵衛これを造り川越源太郎これを成す、年月日とぞ筆太に記しるしおわられ、満面に笑みを湛たたえて振り顧かえりたまえば、兩人ともに言葉なくただ平伏ひれふして拝謝おがみけるが、それより宝塔長とこしなえに天に聳そびえて、西より瞻みれば飛檐ひえんある時素月を吐き、東より望めば勾欄こうらん夕べに紅日を呑んで、百有余年の今になるまで、譚はなしは活いきて遺のこりける。

青空文庫情報

底本：「日本の文学 一 坪内逍遙 二 葉亭四迷 幸田露伴」 中央公論社

1970（昭和45）年1月5日初版発行

初出：「国会新聞」

1891（明治24）年11月～1892（明治25）年4月

※このファイルには、以下の青空文庫のテキストを、上記底本にそって修正し、組み入れました。

「五重塔 新字旧仮名」（入力：kompass、校正：浅原庸子）

入力：佐野良二

校正：川山隆

2009年9月11日作成

2013年3月31日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

五重塔

幸田露伴

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>